

省十八史略

～漢詩の舞台と故事成語をさがして～



まえがき

詩吟を始めて四十七年になる。漢詩を勉強するには中国の歴史を調べなければならない。

新しい漢詩にであうたびにそんなことを繰り返していたが、所詮、中国史を断片的にしか捉えられない。いつか系統的に中国史を把握したいと思っていた。

一方、中学時代に国語の先生から「推敲」という言葉の意味を教わったとき、その意味だけでなく言葉の由来まで説明を受けたことを鮮明に記憶しており、以来故事成語にも興味を持っていた。長引くコロナ禍で時間を持て余している中、何かをしたい。何かをしなければ。という焦りがあった。どんなことをしたらよいのかいろいろ考えた末の結論が、「中国の歴史と、漢詩・故事成語を網羅した資料を作る」ということだった。

中国の歴史は膨大であり、そのほとんどが戦争による王朝の興亡である。故に今回の資料作りは様々な王朝がどのように起こり、どのように滅んでいったかを主眼に編集した。

南房総誠吟会の創立五十周年記念にあたり、すべての吟友にこれを贈ります。

本資料の内容、文章はすべて「新十八史略」全三巻（川出書房新社 昭和五四年発行）から抜粋した。従って歴史の期間は先史時代と呼ばれる神話の世界を除き、夏王朝から南宋までとしてある。

令和四年一月

小林岳遼

目次

第一章	夏王朝	1
第二章	殷王朝	2
第三章	周王朝	3
第四章	周王朝（東周）	5
第五章	秦皇帝	21
第六章	前漢時代	25
第七章	後漢時代	29
第八章	三国時代	31
第九章	西晋時代	40
第十章	東晋時代	41
第十一章	南北朝時代	42
第十二章	隋王朝	46
第十三章	唐王朝	48
第十四章	盛唐・中唐の詩人たち	50
第十五章	五代の世	57
第十六章	宗王朝（北宋）	58
第十七章	文人たちと思想家たち	64
第十八章	南宋王朝	69

《中国歴代王朝表》

先史時代

盤古・天皇・地皇・人皇 — 伏羲 — 神農 — 黃帝 — 少昊 — 顓頊 — 帝嚳 —

帝堯 — 帝舜 — 夏 — 商 (殷) — 周 — 秦 — 西漢 (前漢) — 新 —

六朝

三国時代

東漢 (後漢) — 魏・蜀・吳 — 晉 — 東晉 — 宋 (南朝) — 齊 — 梁 — 陳 — 隋

五胡十六国

北朝

南朝

北魏 — 東魏 — 西魏 — 北齊 — 後梁 — 北周

遼 — 金

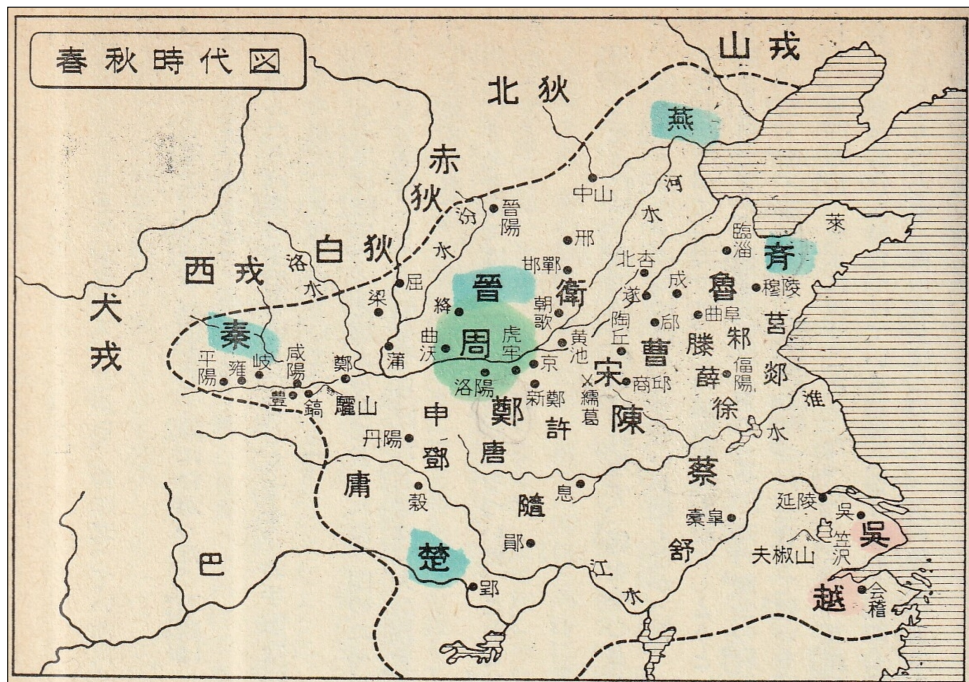
梁 — 唐 — 晉 — 漢 — 周

五代

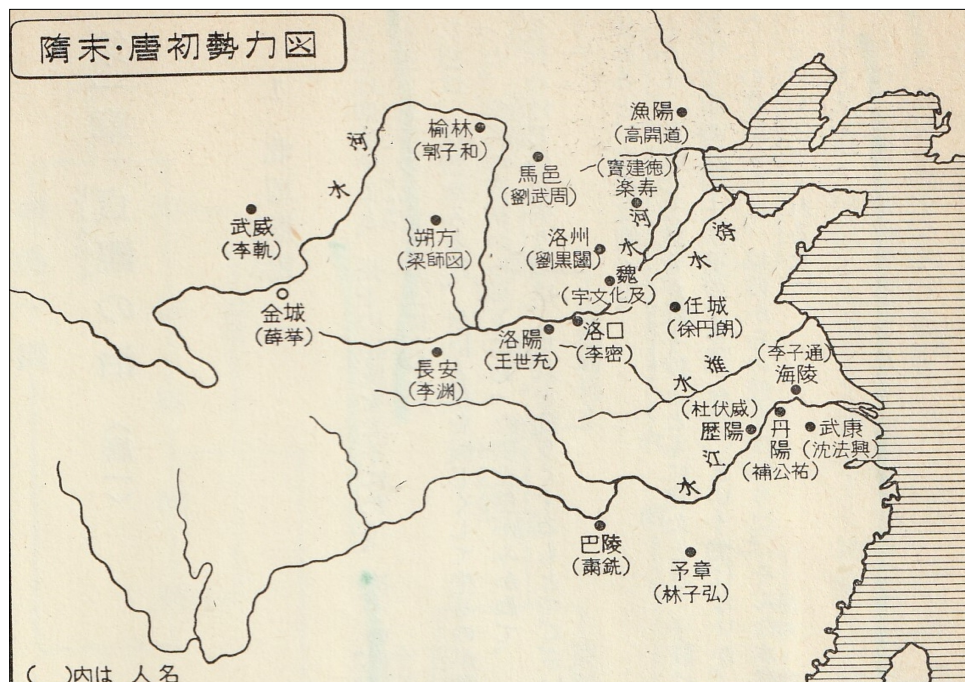
唐 — 宋 — 南宋 — 元 — 明 — 清

僭偽十国

春秋時代図



隋末・唐初勢力図



()内は人名

第一章 夏王朝（十七代 四四〇年）

「十八史略」によれば夏王朝誕生前に帝堯ていぎょう、帝舜ていしゆん（それ以前の三帝を含め五帝と呼ばれる）の帝王時代があった。帝堯の晩年から帝舜の初期にかけ、雨が降り出してやまず黄河が氾濫する未曾有の大災難が襲った。帝舜は治水の責任者を禹うにさせた。禹は十三年かけて治水事業を成就させた。その禹が帝舜の後継として即位し、天子となつて国号を夏かとした。

禹が帝位を継ぐまでは、天子が臣下の中から帝位を継ぐべき人物をあらかじめ定めてこれに位を譲る、いわゆる禅譲が帝位の継承であった。しかしこの時、諸侯たちは禹の仁徳を慕つてその子を帝位につけた。これは世襲という帝位継承であり以降おおむね世襲が行われるようになった。

夏王朝の第十七代の帝位となった桀王けつは、暴君で部下の百官を殺害し、傷つけ、恐怖政治を行い王朝は乱れ末世的な有り様となった。

王宮の膳官ぜんかん（厨房役人）に殷の国の伊尹いゐんと云う者がいた。ある日、桀に食事をすすめにいった折に膳官の分際でありながら桀王けつを諫めた。手ごたえを感じなかった伊尹いゐんは夏王朝に見切りをつけ、その夜、その足でその場を去り殷の湯王とうおうに走った。

星落秋風五丈原ほしおつしゆふうごうごじやうげん（土井晩翠）【朗詠集の124頁、又は資格審査課題吟第一集の31頁】の詩の中

に「伊呂の伯仲眺むれば」との句があるが、伊呂の伊はこの伊尹いゐんを指している。彼は第二章の殷王朝で活躍する。又、伊呂の呂とは第三章の周王朝に登場する呂尚りよしょうのことをいつている。

第二章 殷王朝（三十一代 六四〇年）

殷いんの湯王とうおうは夏の桀王けつを討ち、湯とうは帝位に就き殷いんを開国した。伊尹いゐんは殷いんの宰相となる。

開国時の殷王朝は万民の信を受けてスタートしたが、六百年の年を経ると、夏の桀王けつと並んで中国史上における悪徳天子の標本とされる紂王ちゆうわうが出現する。

朝廷は形骸と化し、政治もない、淫樂にふけた状態で、天下の人心は全く紂王ちゆうわうから離れ、殷の世は世紀末的な状態を呈していた。

殷王朝には天子の政治を補佐する最高の機関として「三公」が置かれていた。

そのうちの一人である西伯せいほく（後の周の文王）は紂王ちゆうわうの行いに嘆息したことを密告され、獄舎に押し込められてしまった。しかし、気の利いた西伯せいほくの家来により獄舎から出る事ができた。出た後も

西伯せいほくは、自分の所領の地を献上することを条件に「炮烙の刑」※をやめさせ、やがて故国である周に帰ることになる。帰った西伯せいほくは常に仁徳を養い、それを所領内の政治に施したので、人民は悦福し、近隣の諸侯も次第に好意を寄せ始めた。

西伯せいほくの死んだ後、歴史の必然として西伯せいほくの子発はつ（後の周の武王）が、腐りはてた殷を滅ぼし、即位して国号を周しゅうとした。

※ 注 「炮烙の刑」とは、深く掘った長方形の穴の中で炭火があかあかと燃えさかっている。

その穴の上に油をぬった銅柱が渡されており、受刑者は衣服をはぎとられてその柱を渡る。

第三章 周王朝（西周 十二代 三三〇年）

周の領主となった西伯はひたすら徳を積み重ねていった。その結果多くの人物が周に集まってきた。その中でも周の歩みに大きな影響を与えた太公望呂尚も、西伯に見出されたのである。

「覆水盆に返らず」

呂尚は若い頃読書にばかり熱中し家事をかえりみなかった。当然家計は火の車である。妻は愛想をつかし出て行ってしまった。後年武王が殷の紂王を滅ぼし、周の天下になったとき呂尚は斉に封ぜられ諸侯の列に加わった。すると逃げた妻がやってきて再び妻にして欲しいと申し出た。呂尚は水鉢の水を地面にこぼし彼女にその水をもう一度鉢にすくってみろといった。いったん地面にこぼれた水はもとの水鉢におさまるわけがない。彼女がげんな顔をしていると、呂尚は「覆水盆に返らず」といったという。この故事から、一度失敗したしたら取り返しのことのないことのたとえ。

呂尚はなぜ太公望と言われたか

呂尚は大人物ぶりを發揮する機会に恵まれないまま、いつしか白髪をめだつ年齢になってしまった。

彼は渭水のほとりで毎日釣り糸を垂れていた。そこへ獵に出ていた西伯が通りかかり、呂尚の横顔を見た瞬間、西伯はなみなみならぬ人柄を見てとり、すっかり喜んで言った。

「私の太公（祖父の古称）が、いまに聖人が現れて周に繁栄をもたらしてくれる、といつも待ち望

んでいました。あなたこそその人です。どうか一緒にお越しください。ご教示を願いたいのです」

こうして呂尚ろしやうは西伯せいはいくの師となって周に仕えることになり、**大公**が待ち望もちなんでいたことに因ちなんで

「**太公望**」と称された。後世、釣り師と称して太公望というのは彼の故事に由来するものである。

西伯せいはいくが死ぬと、その子発はつが後を継いだ。これが後の周のちの武王ぶである。武王は亡き父を追尊ちゆうそんして文王ぶんおうと称し、呂尚ろしやうを師父と仰いで公私にわたる指導を受けながら、九年後に紂王ちゆうわうを討滅すべく東方に向け軍を進めた。途中武王の下に八百諸侯が付き従い、殷を圧倒してついにこれを滅ぼした。

万民を苦しめぬいた紂王が滅びて周王朝が華々しく発足したが、武王は夜もろくろく寝なかった。

その理由を問われて曰く「殷は紂王が不徳であったため天命を失って亡び、代わってわが周が王業を成し遂げることができた。しかし天命が殷に下った初めには、殷王朝に多くの賢人が登用され天命を支えた。だがその後賢人は起用されず奸佞かんねいの臣がはびこって滅亡するに至った。予はまだ賢人も登用せず、政治の手だても十分に考えていない。このままでは天佑を保ちうるかわからない。寝ている余裕など無いのだ」

これほどまでの熱意で建国した周王朝だが。

十二代目の幽王ゆうおうは申后しんこうを正妃にして宜臼ぎきうを太子に立てた。

即位三年後、女奴隷の褒姒ほうじに魅せられ彼女との間に伯服はくふくという子をもうけた。

すると幽王^{ゆうおう}は、正妃とその子の太子宜臼^{ぎきゆう}を廃^{ほう}し、褒姒^{ほうじ}を正妃に、伯服^{はくふく}を太子に立ててしまった。
やがて前の妃の父、申侯^{しんこう}が娘や孫が不当に冷遇されたことから幽王^{ゆうおう}に恨みをいだき、都を襲って幽王^{ゆうおう}を捕え殺してしまった。

申侯^{しんこう}は諸侯をまとめて廢太子の宜臼^{ぎきゆう}を即位させた。これが十三代平王^{へいおう}である。

こうして平王が即位はしたものの、もはや周室の權威は地に落ちて、西方の蛮族の侵略を支えることが出来ず、都を東方の洛邑^{らくい}（後の洛陽）に移さざるをえなかった。

十八史略ではこの後も続く周王朝（東周）に対しここまでを西周として区別している。

第四章 周王朝（東周 二十五代 七一五年）

春秋という時代

周の東遷は、古代中国の”よき時代”の終わりを告げる鐘であった。中国の歴史は以後、春秋時代、戦国時代と底しれぬ戦乱の泥沼の中に足を踏み入れてゆく。

周という帝国の国家組織はいわゆる封建制度であって、王室を中心とする多くの諸侯国という細胞からなる個体のようなものであった。だが東遷以後、王室は著しく衰微し、諸侯を制御する力を失ってしまった。無統制に放り出された大小諸国は、それぞれの利害関係によって、あるいは同盟し、あるいは敵対して、飽くことなき戦争を繰り返していったのである。

こうして絶えず相争いながらも、これら封建諸国は、かれらが一つの個体のなかの存在であるという意識は持ち続けていた。

当時北方の蛮族や南方の、中原文化圏に属さぬ楚国が北侵の機会を狙っていた。ひとたびこれら異民族の脅威をうけたとき、中原の諸国は一つのものとなってこれに対抗する必要を感じていた。本来ならばその団結の中心となるものは周の王室であるはずであった。しかし王室はその力を失っていたので、最も実力のある諸侯が、中原諸侯同盟の盟主となり、周王の役割を代行して、他の諸侯に号令することになった。これがいわゆる覇者である。

ここで注意すべきことは、覇者は第一の実力者でありながら、無力な王室を倒して天下を取ろうとせぬばかりか、対異民族の戦い（攘夷）を行うにあたって、あくまでも王の代役という地位にとどまり、「尊王」を看板に掲げていたことである。周王は実質的には無力化していても、春秋時代にはまだ精神的な支柱である象徴としての価値は持っていたのである。

ところで、この時代に対する春秋という呼称だが、これは当時山東省の一部を占めていた魯の国の宮廷年代記『春秋』の名から出ている。そこに記されているのは魯の隠公元年から定公十四年までの二四二年間の出来事である。この期間を指して春秋と呼ぶ。だから厳密に言えば、春秋は東遷からおよそ五十年の後にはじまるが、一般には大ざっぱに東遷以後、紀元前四八一年までを春秋時代と呼ぶ場合が多い。

春秋時代になって実力をつけた諸国は実に十以上（楚・斉・晋・秦・鄭・宋・呉・越）を数え、諸国間の紛争は終わらず、戦乱は泥沼化してゆく。

その中から覇者として台頭したのが、春秋時代きつての名君、斉の桓公である。

「管鮑貧時の交わり」

齊の国の桓王は、鮑叔の推挙で管仲を宰相に迎える。管仲は貧困でしばしば鮑叔を欺いていたが鮑叔は管仲の才能あることを見て、その窮状をよく理解し、管仲をいつもかばっていた。

管仲は宰相になり「自分を真に理解してくれるのは鮑叔だ」と感謝した。

「貧交行」（杜甫）【1巻の165頁】の詩の中に「君見ずや管鮑貧時の交わりを」とあるのは、

この管仲・鮑叔を指している。

「星落秋風五丈原」（土井晩翠）【朗詠集の124頁】の詩の中で「管仲樂毅たそや彼」との句があるが、管仲はこの人であり、樂毅の活躍は十六頁〜十七頁に記載してある。

管仲は斉の宰相、樂毅は戦国時代の燕の武将であり、後の三国時代に出てくる蜀の丞相、諸葛孔明が、この二人と並び評価されていたことから、作者はここに載せた。

中原の覇者桓王が死んでから十二年後に晋の二十二代目文公が新たな中原の盟主たる覇者となった。が、その後も諸国の争いは果てることなく一五〇年間続くことになる。

春秋時代のハイライトともいえる呉越の盛衰物語は、さすがに多くの詩歌となり、故事成語を生

み出している。従つてこの物語を詳しく記してみたい。

「臥薪嘗胆」

呉の祖は太伯である。太伯は周の太王（古公）の長子であつた。

越の祖は夏の禹王の後裔である。禹王は天下巡行の途、会稽で死んだ。禹の五代目である夏后帝小康の子が会稽に封ぜられ、越の国の基となつた。

小康の子から二十余代後に句踐が越の王位についた。句踐のもとには范蠡という名臣がいた。

呉は越を滅ぼそうとして兵を起こした。越では呉の行動を見ぬいて、呉軍が越を攻める前にこれを迎え撃つた。ために呉王は死んだ。臨終のとき太子の夫差に「そなたの父を殺した者は越王句踐であることを忘れるな」と遺命した。夫差は夜な夜な薪の上に臥して復讐の念を研ぎすました。

「会稽の恥」

越王は夫差が越に復讐しようとしていることを知り、呉を討とうとした。しかし范蠡は王を諫めた。しかし句踐はきかず兵を起こした。

呉王夫差はそれを知ると直ちに越軍を迎え討つた。夫差のはげしい復讐の念で鍛えられた呉軍は越軍を粉砕した。句踐は五千の敗残兵を引き連れて会稽山に逃れた。

句踐は范蠡の諫めに従わなかつたことを悔いて范蠡に問うた。

「呉の大軍に囲まれている今どうすればよいか」范蠡は答えた。

「和を請うしかありません。王自ら呉王の臣下となられてもやむを得えません」

越の国をおこすためには、生きて恥をしのべと受け止めた句踐はうなずき、種を呉王のもとに遣わして降伏を請うた。呉王夫差は降伏を許そうとしたが、伍子胥がそれをとどめた。しかし句踐はひそかに、貪欲な呉の宰相伯嚭へ美女や財宝を贈った。伯嚭はそれを受け取り、句踐の願いを受けるように進言した。夫差の心は伯嚭の勧めに傾いた。だが、伍子胥は再び夫差をおしとめて言った。

「いま呉を滅ぼしてしまわなければ必ず後悔します。句踐は名君であり種や范蠡はまことの忠臣であります。心から呉の臣下たることに甘んじているはずはありません。眼前の利益や敗者への憐れみをもつて越を許されるならば、かれらはまた国を立て直して呉に背くことは必定です」

しかし夫差は伍子胥の言をきかず、ついに句踐の申し出を受け入れた。

句踐は許されて国へ帰った。だがその国は呉の属領であり、自らは呉王の臣下たる身であつた。

かつて呉王夫差が薪の上に臥し、復讐の念を持ったように、句踐はいま、常に傍らに胆をそなえ

飲食するとき、必ずその苦い味を嘗めて会稽の恥を思い返し、復讐の念をあらたにした。

范蠡は国内の事は種にまかせ、みずからは呉の動静をみるため人質として呉王のもとへ行つた。

夫差は戦勝の喜びに酔つて越の帰順に疑いを持たない。伍子胥だけが越の本心を見通していたが、

宰相伯嚭は、越の賄賂を受けて、伍子胥の呉王に対する進言を抑えていた。

范蠡の見るところ、呉王は伍子胥の言葉より伯嚭の甘い声を喜んでいようであつた。

呉王が新たに宮殿を造営することを知った范蠡は、良材二百本と美女五十人を送らせた。

范蠡は、王者のおごりを、壮麗な宮殿にあらわそうとする夫差に対して、さらに美女を配して国を傾けさせようというのが、范蠡のねらいであった。范蠡は伯嚭の計らいよって二年後に越に帰った。

夫差は喜び、送られた良材で「姑蘇台」を造営した。だが夫差をもっと喜ばせたものは、姑蘇台よりも五十人の美女中の西施という女であつた。夫差は西施を溺愛した。

会稽の恥から九年目。呉と越の外交かけ引きで伍子胥はたびたび夫差に諫言した。ために夫差も伍子胥をうとんじるようになる。夫差も次第に伯嚭の言を聞き入れるようになる。そのような状況の中、ついに伯嚭は讒言を用いて伍子胥を殺すよう夫差に進言した。

夫差はこれを受け入れ、使者を遣わして伍子胥に属鏹という名剣を与えた。これは、この名剣をもつてみずから死ぬ、ということである。伍子胥は天を仰いで嘆息した。

「呉に背いている者は讒臣の伯嚭だ。王は讒臣の言を信じて私を殺そうという。私は王の父を助けて呉の王にした。さらに呉王を一方の覇者たらしめた。諸公子がその後継を争っているとき、先王にすすめて夫差を太子に立てさせたのも私だ。私がいかなかったならば王は呉王になることもできなかったのだ。王位につくとき、王は国の半分を私に与えようとまでも言ったではないか。勿論私は断った。そのような私を、いま讒臣の言にまどわされて殺すとは！」

会稽の恥から十二年後、夫差は黄池に諸侯を会して、待望の覇者たる地位に立った。この時呉の精銳は、呉王夫差について黄池に行っている。呉を守っているは太子の友だけだ。ために越王句踐は范蠡とともに四万の軍を引きつれて呉に攻め入った。呉軍はこれを支えられず、太子友は捕らえられて殺された。

その七年後、越は再度呉を攻め、呉王夫差を姑蘇城に包囲した。句踐は夫差を哀れに思い、他の地に百家を与えて余生を送らせようとした。その時夫差は、もう生きることをあきらめて「わしはもう老いてしまった。いまさら越王の臣となつて生き恥をさらしたくない。無念なことは讒臣の言にまどわされて忠臣を疑い、このような結果を招いてしまったことだ。伍子胥を殺してしまった自らが恥ずかしい」と言つて句踐の厚意を断つて夫差は、潔くみずから首を刎ねて死んだ。

ただ、伍子胥に会わせる顔がないと、顔を覆いかくして死んだという。

呉の王として二十三年、一度は天下の覇をとなえもした。その呉はここに滅んだ。

句踐は厚く夫差を葬り、そして、夫差の不忠の臣として伯嚭を殺した。

「狡兔死して走狗煮らるる」

呉を滅ぼした句踐は、兵を率いて北上し、斉・晋の諸侯と徐州に会し、天下に覇をとなえた。

范蠡は上將軍と称され名声をなしたが、彼は「大きな名声のもとで長く身の安きを保つことはできない」として全てを捨て越を去り、斉に移った。范蠡は斉から越の大夫種に書状を送つて言った。

「狡兎死して走狗煮らる（兎を取りつくしてしまえば、猟犬も用がないとして煮られてしまう。敵国を滅ぼしてしまえば謀臣は不要とされるという意）」という。越王の人柄を見るに、艱難かんなんを共にできるが、太平を共にすることはできない。あなたは、何故越王のもとを去らないのか」種しやうはその書状を見て思い当たることがあり、病と称して家に引きこもってしまった。すると、ある者が讒言ざんげんして、種しやうは反旗をひるがえそうとしている、と王に告げた。句踐こうせんは怒り、種しやうに劍（属鏤の劍）をおくった。種しやうはその劍をもつてみずからそのくびを刎ねて死んだ。

越王句踐こうせんは呉を滅ぼしてから八年後に死に、さらに、三十年後には越も楚により滅亡した。

「児島高德桜樹に書するの図に題す」（斎藤監物）【2巻の71頁】に「両行の字桜樹に付与して」とあるは、児島高德が後醍醐天皇をお慰めしようと「天莫空句踐こうせん、時非無范蠡はんれい」と桜樹に二行に削って書いたことを言っているが、これは、越王句踐と臣范蠡のことを言っている。

「姑蘇台」（絶海中津）【1巻の48頁】にある「忠臣甘んじて受く属鏤しよくるの劍」とは臣伍子胥ごししよが宰相伯嚭はくひの讒言ざんげんにあい、呉王夫差ふさから属鏤しよくるという名劍を賜り、みずからの首を刎ねたこと。

「越中懷古」（李白）【3巻の120頁】は越王句踐こうせんが呉を打ち破って国に帰ったことを懷古している。

「蘇台覽古」（李白）【3巻の121頁】でいう「呉王宮裏の人」は夫差ふさが溺愛した西施せいしのことだ。

戦国時代

越が楚により滅亡した少し前、北方の雄であった晋も昔日の面影を失い、臣下の公卿たちの間で激しい封地争いが絶え間なかった。その争いで勝ち残った公卿たちは敗れた公卿の封地を分け合つて次第に肥え太り、やがて主家の晋室をも凌ぐ勢力となつてきた。こうして最後に智・趙・韓・魏という公卿が勝ち残つた。中でも智の力は他の三卿を圧し、智伯瑤が智家の当主となるに及んで晋国を智家の思い通りに動かすという有様であつた。瑤は貪欲で、王室の実権を握っている事だけでは満足できず、他の三卿の勢力を削ぐことを始める。が、逆に三卿によつて生け捕りにされ首を刎ねられた。この事変により趙・韓・魏が智伯の領土を三分して国力を伸長したため、晋室はいよいよ非力化し諸侯の実体を失つていった。

周室がこの三家に対して諸侯の称号を与えるに至り、三家と晋室とは主従の関係ではなくなった。史家は、三家が諸侯の位に列した年（前403）以降を戦国時代と呼ぶ。

勢力図は、東方の齊・西方の秦・南方の楚・北方の燕・中原には趙・魏・韓という七国となり、いわゆる「戦国の七雄」の状態となつていった。

「合従連衡」

戦国時代をどう生き抜くかは、七国の共通した課題である。その方策を説いて回つた二人がいる。

蘇秦と張儀である。蘇秦は中原諸国との合従（従は縦に同じ。つまり燕・趙・韓・魏・楚・斉の

六国が、縦に同盟を結んで西方の秦にあたる策）を説いた。一方ライバルである張儀は六国を横に
向かせ、秦と同盟を結んで多国にあたつてゆく策で、**連衡**（衡は横の意）と呼んで説いて回った。

憂憤の詩人・屈原

屈原は楚の王族を支える昭・屈・景三氏の一族。楚の懷王の侍従となり、厚い信任を得ていた。

当時衰退の一途をたどつていた楚の国では、西の強・秦について**連衡策**（張儀の政策）をとるか、

東の大国、斉を中心に**合従策**（蘇秦の政策）を採るかで国論は二分していた。屈原は親斉派の旗

頭として斉に行き、同盟を結ぶが、張儀がこれを阻止すべく楚の要人に莫大な金品をばらまき、そ

れを破棄させ、あまつさえ、屈原を楚の懷王に讒言もさせた。その結果として、斉国から帰国した

屈原は懷王に疎んぜられ、失脚して国を追われる。これが一度目の放浪生活の始まりである。

その後も張儀の口車に乗せられた楚の懷王は、大軍を發して秦を伐とうとするが、秦はこれ幸いとばかり、斉と同盟を結んだうでこれを打ち破った。楚の懷王は屈辱的な和議を結ぶ結果となる。

この時になつて懷王は、「秦国おそるべし」と説いた親斉派の屈原の意見が正しかったと思つた
ことであろう。秦への講和使節とは別に、斉に対してもかつての背盟謝罪を兼ね、国交回復をはか

るための使節を立てる必要があった。それには屈原のような親齊派の人材が必要である。

国都に呼び出された屈原は再び齊への使節に立った。

秦も斉も代が変わり、楚は頃襄王^{けいじょうおう}が即位すると末弟の子蘭^{しらん}を令尹^{れいいん}（行政長官）に任じた。この

子蘭^{しらん}こそは、秦の要請に応えて懷王^{かいおう}を秦に送り、王を秦で病没させた張本人である。この時屈原は

王を秦に行かせることに反対していたため、この人事に憤慨し、心ある人々と子蘭^{しらん}を攻撃した。

子蘭^{しらん}は屈原が反対派の急先鋒であるのを見て大いに怒り、靳尚^{きんしょう}に命じて屈原を頃襄王^{けいじょうおう}に讒訴^{ざんそ}させ

王は再び屈原を国都から追放する。屈原の二度目の、そして最後の放浪生活が始まる。

放浪の間に屈原は数々の文学的作品を創り出した。放浪の期間は定かではないが最後に屈原は荒

廢した祖国を嘆き悲しみ、汨水^{べきすい}・羅水^{らすい}の合流点である汨羅^{べきら}の淵^{ふち}に身を投じて果てる。

長編の歌「懷沙^{かいさ}」（沙石^{いし}を懷^{いだ}きて）は辞世の作として読まれよう。

屈原の死後およそ十年、秦の大軍が楚国に侵入し、都は陥落し、先王の墓は焼かれ、頃襄王^{けいじょうおう}は東のかた陳^{ちん}に向かつて遁走し、やがて楚は秦に合併された。

「獄中作」（高杉晋作）【2巻の100頁】に詠う「石を懷いて流れに投ず楚の屈平」の屈平とは、

名^なを平^{へい}、字^{あざな}を原^{げん}と言った屈原のことである。「石を懷いて流れに投ず」は辞世の歌「懷沙^{かいさ}」

（石を懷^{いだ}きて）と共に身を投じたこと。そのあとの「人は悲しむ汨羅^{べきら}の江^{こう}」の汨羅^{べきら}の江^{こう}とは

身を投じて死んだ場所である。

「まず隗より始めよ」

燕えんの昭王しょうおうが即位したところ、燕えんは内乱と斉せいの侵略を受け、ほとんど破滅に近い状態であった。

昭王は国を再興するには、まず賢者を招いて国事をはかるのが最良と考え、賢者を募った。しかし、これはという人物はなかなか来なかった。そこで郭隗かくかいに相談した。郭隗かくかいは答えた。

「昔ある君主が、千金をもつて、一日千里を走る馬を求めましたが手に入らなかった。するとある男が『私が手に入れてさしあげましょう』というのでその男に頼んだところ、千里の馬の骨を五百金で買って帰りました。君主が怒りますと、その男は『世間では、死んだ骨でも五百金で買うのだから生きている馬ならどんなに高く買うだろう、と思うに違いありません。そのうちきつと望みがないまま』と申しました。はたせるかな、一年もたたぬうちに、千里の馬が三頭も入ったということ。いま、王が賢士を招こうとお思いでしたらこの私、**隗よりお始めください**。わたしですら厚く遇せられるということになれば私より優れた人物が千里を遠しとせずに集まることではないでしょうか」

そこで昭王は郭隗かくかいのために宮殿を新築してこれに師事した。するとその通り、天下の賢士が争って燕に馳せ参じた。その中に、昭王が待ち望んでいた千里の馬、**楽毅**がくきがいたのである。

楽毅がくきはもと趙の武将だったが、内乱が起きたので魏に難を避けていたところ、昭王が士を遇する

という評判を聞き燕にやってきた。昭王は樂毅の人物に惚れこみ亜卿（上卿の次）に任じた。

こうして賢士を募る一方、王昭王は内政の充実につとめ、即位後二十八年、燕は富み榮え、士卒は後顧の憂いなく戦いに出るようになった。

そのころ齊は宋を滅ぼし楚を破り、韓・魏・趙を伐ち、さらにこの三国と同盟して秦を攻め、地を広げること当たるべからざる勢いであつた。そこで昭王は樂毅に齊討伐のことを相談すると樂毅が、

「齊は強国、燕一国でこれに当たるのは容易ではありません。齊は諸国に恐れられていますが、それだけに反感も買っています。韓・魏・趙と同盟してお伐ちになるのがよろしいでしょう」

さっそく工作をし、韓・魏・趙との盟約が成立し、秦もこれに加わつた。

樂毅を総大将とする五か国連合軍は、齊に向かつて進撃した。齊はこれを迎撃したが大敗して退却、ここで燕以外の四国軍は引き上げたが、樂毅率いる燕だけは齊に残り、独力で齊の都臨淄へ追撃した。

齊王は衛に逃げた。樂毅は臨淄に入城すると、齊の財宝や祭器をことごとく奪つて燕に送つた。

昭王は喜び、樂毅を昌国に封じ、昌国君と号を与えた。

「刎頸の交わり」

秦の昭襄王から趙の恵文王に一通の国書が届けられた。内容は、恵文王の持つへ和氏の璧と秦

の十五城を交換してくれないか。ということである。〈和氏の璧〉とは天下の名玉である。強国秦からの申し出を受ければ名玉だけ取り上げ、あとは知らぬ顔とする恐れは十分ある。かといって断れば即刻兵を向けるは必定。この難局をどう乗り越えたらよいか、重臣たちは頭を垂れるばかり。その時「わたくしの家の食客に相如という男がおります。この男ならこの大事を全うするかもしれない」と申し出た者がある。恵文王は直ちに相如を引見し意見を求め、かつ使者は誰が良いかを尋ねた。「趙に適当な方がいなければ私が行きましょう」整然たる論理と確信に満ちた態度に恵文王は名玉を託して秦へ送りだした。趙の使者から名玉を受け取った秦王は相好を崩して眺めいり、居並ぶ臣下に渡して眺めさせた。臣下たちは万歳を称えて秦王の威勢をたたえている。その有様をじっと見つめていた相如が、突然進み出た。「その玉には瑕きずがあります。今のうちにお教えしておきましょう」秦王がなにげなく差し出す名玉を受け取った相如は、つかつかと柱のそばに歩み寄るなり、怒気満面、王を睨みすえた。

「王の国書を頂いたとき、我が国の重臣はたちは、みな秦王は名玉を欺き取るつもりだといったものです。しかし私はそうは考えなかった。匹夫すら人を欺くようなことはせぬ。いわんや秦は大国である。さような無道をするはずはない。たかが名玉ひとつくらいで強国秦と事をかまえるのは愚の極みであると進言し、趙王もこれに同意して自分を使者としてよこしたのです。しかるに王の無礼は何事ですか。城を引き渡すという約束などまったくなかったような顔をしておられる。この名

玉を力ずくで取ろうというのなら、取られたがよろしい。その前に、私の頭はこの名玉とともに、柱に当たって粉微塵こなみじんとなつていくでしょう」

狼狽した秦王は無礼を詫びて城を明け渡すことを約束した。

趙の廉頗れんぱ將軍が、秦とともに斉に侵攻した際、大功をたてて上卿に任ぜられていたが、相如しょうじよが、めきめき出世し、上卿に昇り、しかも廉頗將軍の上席に就いたことをよく思わず「わしは軍勢をひきいて戦場を馳駆し、大功をたてて上卿となつた。しかるに相如しょうじよは口先ひとつでわしの上にすわる身分にのし上がった。しかもあいつは素性も知れぬ卑しい男。あんな男の下風に立つことなど、このわしにはとてもできん。」と不満をもらす。これを耳にした相如しょうじよは廉頗將軍を避け通した。その不甲斐なさに部下から愛想づかしをされた。相如しょうじよが部下に尋ねた。「お前は廉頗將軍と秦王といずれをより怖れるか」「もちろん秦王です」「その秦王を宮中で叱咤し、その臣下たちを辱めた私だ。廉頗將軍を怖れるわたしではない。あの強国秦が我が国に手を出しかねているのは、我々二人がいるからだ。しかるに我々二人が争つていずれか一方が死ねば秦は攻めてくるであろう。將軍を避けるのは国の危急を思えばこそだ」この話を聞いた將軍は相如の前に平伏した。

以来、二人は「刎頸ふんけいの交わり」※をむすんだのである。

※注「刎頸の交わり」とは、刎は、はねるの意。頸は、くびのこと。

転じて、互いのためには、首をはねられて死んでも悔いしないほどの親しい交わりを言う。

「易水の送別」

秦は韓・趙を滅亡させ、燕に攻め入る体制を整え、燕との国境である易水まで迫った。

燕の太子丹は攻め入られるより先に、刺客を送って秦王政を刺すよりすべはないと考えた。その使命に田光を指名した。田光は剣の達人であり、智謀深遠の士として知られ、世間から田光先生と呼ばれていた。太子からの使者を迎えた田光は、

「決してお言葉に背こうというのではありませんが、駿馬も老ゆれば驚馬に等しい。太子はおそらく私の盛装のときを聞いて駿馬とみなされたのでしょうか、すでに私は驚馬です。しかしこの驚馬は一個の駿馬を知っています。名は荊軻と言います」と断り荊軻を推した。

田光は荊軻を尋ねて事の次第を述べ、こう言った。

「太子は私にこういわれた。国の大事だから、もらさぬようにと。このことは私が太子に疑いを抱かせたからにほかならない。誠に恥ずべきことだ。君は太子のもとへ行つて伝えてくれ、田光は死にました。もはや事の漏れる恐れはございませんと」

田光は荊軻のうなづくのを見るなり、短剣でみずからその首を刎ねた。

ついに出発の日が来た。太子丹をはじめ、事を知っている数名の者だけが、喪服に変えて荊軻を易水のほとりまで送っていった。易水の風は冷たく人々の肌を刺し、荊軻の歌う声は悲壮に人々の心にしみた。

風蕭蕭^{しょうしょう}として易水寒し

壮士ひとたび去ってまた還らず

その声は聞く人の肺腑をえぐった。人々はみな目を怒らして秦の方を睨み、髪逆立って冠^{かんむり}をつか
んばかり。すでにして荊軻は去り、その姿はしだいに遠くなっていた。

易水の送別〔駱 賓王〕【1巻の116頁】に「此の地燕の丹に別る 壮士髪冠を衝く」とある。

「燕の丹」とは、燕の太子丹のことで、「壮士」は荊軻を指している。

「髪冠を衝く」とは、はなはだしく怒って、髪の毛が冠をつきあげる。秦への怒りを表現。

第五章 秦皇帝（二代 十五年）

前二五六年、秦が東周を滅ぼす。

前二三〇年から前二二一年の十年間に、秦は六国をつぎつぎに征服し、中国を統一する。

周王朝の末期には周室の権威はまったく無く、世は戦国の時代であったが、それでもわずかに命脈を保っていた。周室が滅んだ後、秦が中国を統一するまでの三十五年間は「戦国の七雄」による無政府状態での戦国時代であった。

秦が東方の強国^{せい}齊を破って、天下は秦に帰し、戦国の世は終わりを告げた。

秦王政はここに令を下している。

「自分は眇々（びようびよう）（小さいさま）たる身をもって兵を起こし暴乱を誅（ちゅう）した。幸い六国（韓・魏・趙・燕・楚・斉）の王はみな罪に服し、天下大いに定まるを得たがこれ誠に祖宗の心霊のおかげである。いまにして王という号名を改めなければ、この功をたたえ、この功を後世に伝えることもかなうまい。汝ら帝号を議せよ」

王の号名を改めよ、という秦王政の（せい）気持ちは、秦（統治者）と天下との関係が、周室と諸侯の関係とも異なっているし、戦国時代、六国のそれぞれが王として自分の領土を直接統治した場合とも異なっている。秦室は、中国全土を直接統治する唯一の絶対者であり、天地とともに永遠の、並ぶものなき存在として君臨しなければならない。その意味を天下に徹底させ、誇示しなければならない。

秦王政はそう考えたのである。

この命を受けて丞相はじめ宮廷の高官たちは学者を集め相談。秦王の意向も入れて「皇帝」という新しい称号を考えた。また、一世からして始皇帝と名乗った。「皇」は先史時代の伝説である「三皇」※から、「帝」は「三皇」に続いて天下を治めるようになった「五帝」※からそれぞれとつたものである。

※注 「三皇」・「五帝」については巻頭にある、中国歴代王朝表を参照のこと。

「焚書坑儒」

始皇帝は不死への憧れを持っていた。そこで方士（不老不死の術や技を行う人）ほうし 蘆生ろせいに不死の薬を探させていた。が、所詮、薬は見つかるわけはなく、蘆生ろせいは見つからない理由を始皇帝に押しつけて注文をした。始皇帝はひどく蘆生ろせいを信頼していたので、それを受け入れていた。しかしそのようなことが何回もできるわけがなく、蘆生ろせいは始皇帝をだましおおせるものではないことを知ると、咸陽かんようの都から姿を消した。それを知るや、さすがの始皇帝も彼のまやかしに気が付いて激怒した。「不死の薬を求めるとして、朕から金をまきあげたばかりか、妖言をまき散らして民を惑わす不逞ふていの輩やからめ、この類たぐいは他にもあるはず、詳しく取り調べよ！」

命を受けた御史は、方士や学者をかたづけしからひつ捕らえて吟味した。ここで学者というのは、あやしげな知識を売り物にして、皇帝にこびへつらい金銭を巻き上げる輩やからのことで、当時方士やこのような連中が皇帝のまわりにうようよ集まっていたらしい。

捕えられた連中は、互いに他を中傷し、罪をなすりあい、自分の罪を逃れようとした。この有様を見て始皇帝はますます怒りをつのらせ、四百六十余人の方士や学者を生き埋めにして殺してしまつた。

いわゆる「坑儒」の実相は、実は右のような次第であつたらしい。この時、始皇帝がなにより憎

んだのは、インチキな方士・学者の輩であって、のちにいわれた「**儒者**を穴（**坑**）埋めにする」というのは説明不足。たしかに真の儒者がまきぞえをくった、ということはあるであろう。

秦は皇帝の詔と法とが絶対なもので、それにくちばしをはさむことを許さぬ立場をとる以上、言論の統一や弾圧を行う必要はあった。これを強く主張したのは李斯である。

「今を師とせず、古を学ぶ学者は当代の政事をそしり、民をまどわすものである。このような学者が多くなれば、結局は徒党をくんで世を乱すものとなる。かれからは詩経・書経を蔵し、これを学ぶことを禁止すべきである。そしてこれらの**書籍**は焼却（**焚く**）することにする」

こうして言論の統一が行われた。以上が「焚書」であり、先の「坑儒」はこの一年後に行われた。始皇帝は、その誕生から十一年後に歿した。

二世皇帝は、趙高によって擁立された胡亥で、傀儡たるにふさわしい凡庸な皇帝であった。

長らくの秦の圧政に苦しめられた各地の農民は、武装して大規模な農民蜂起をする。またこれに呼応して、秦に反旗をひるがえした者の数は、数えきれぬほどであった。その中で項羽と劉邦の両者は破竹の勢いで秦の首都咸陽に迫った。

始皇帝が天下統一して十五年、秦は滅んだ。項羽は西楚の霸王となり、劉邦は漢王となる。

「獄中感有り」（西郷南洲）【2巻の81頁】の初句に「朝に恩遇を蒙りて 夕に焚坑せらる」とある。「焚坑」とは、この焚書坑儒を言っている。「洛陽」とは中国の古都で、東周・後漢・魏・西晋などが都した所。転じて日本では京の都のことをいう。

第六章 前漢時代（十二代 二一四年）

両雄並び立たず、漢（劉邦）・楚（項羽）は争い、ともに四つに組んだまま相手を倒すことができない。漢王は斉・魏の諸将と垓下（がいが）に相会し、項羽との決戦に挑んだ。

「四面楚歌」

劉邦は圧倒的な兵で項羽を攻めた。項羽は大敗し、兵をまとめて罍壁に立てこもり、兵も少なく兵糧も尽き果てていた。漢の軍と諸侯の兵が十重二十重に取り囲んでいる。

夜になり、罍を囲んでいる兵士たちの唱う歌が項羽の耳に響いてきた。それは項羽の母国、楚の歌であった。**四面に楚歌**を聞いた項羽はわが耳を疑う思いで、「漢はすでにわが楚を取ったのか！なんと楚人の多いことであろう！」と嘆いた。

もはやこれまでと思い定めた項羽は、虞姫（ぐき）と別れの酒を酌んだ。また愛乗の駿馬は名を騅（すい）といった。項羽はここにおいてみずから詩をつくって歌った。

項羽は、追ってくる漢軍を蹴散らしながら逃げたが、最後はみずから首を刎ねて果てた。

「垓下の歌」(項羽)【1巻の162頁】に騅とあるは項羽の乗った愛馬。

虞は虞姫のこと。項羽は美人の彼女を寵愛し、いつも陣中にともなっていた。

漢王劉邦は帝位にのぼった。漢の高祖である。都を長安にする。

漢の十二年には高祖は死亡。呂后の子が恵帝となると、以後は呂太后と一族が実権を握ることになる。

呂后は戚夫人(高祖が秦の都、咸陽をおとし漢王と称したところ見出された。可憐な美しさで高祖の心をとらえ、その寵愛を一身にあつめた。それからは各地を転戦するとき戚夫人のみをとめた)の子を殺し、さらに戚夫人をも残酷な方法で殺し、死体を廁に捨てた。

異常な嫉妬心以外に、呂后は漢室を守るために高祖をたすけた英雄豪傑を次々に殺した。

呂太后のたった一人の男児である恵帝が死んだ後、立場の悪くなった彼女は、呂一族を宮中の要職につけ、太后の地位をゆるぎないものにした。

西漢は外戚によって滅び、東漢は宦官によって滅んだとよく言われる。西漢はそのものズバリ、外戚に国を奪われたのである。その外戚とは、王莽である。

外戚王家の台頭は、九代宣帝のときで、太子奭の寵を受けて懷妊した王政君から始まる。

宣帝は王政君が生んだ初孫に驚と名付けた。初孫三歳にして宣帝が歿し、太子奭が即位して元帝

となる。王政君は皇后に、驚^{きょう}は太子に立てられた。元帝が歿し、太子驚^{きょう}が即位^{せいい}し成帝となる。それに伴って皇太后となった王政君は王家縁故の者を取り立て一挙に王家の勢力を広げた。朝廷はまるで王氏にあらざれば人にあらず、という観を呈するに至った。

この環境で、王家の専横は高じ、成帝は傀儡^{かいらい}となるは当然の帰結である。

「折檻」

もはや天下は劉氏の手から、王氏の手に移った観があつた。

一方で地方では、王氏の専政と苛酷な収奪に耐えられなくなった人民たちが立ち上がろうとしていた。

元鼎令であつた朱雲^{しゆん}もその中のひとり。彼は意を決し拝謁を願い出て、成帝の前に進むと昂然と言いつつ切つた。

「こんにち、朝廷の大臣どもはどれもこれも禄盗人^{ろくぬすつと}ばかり。願わくは佩領の劔を拝借し、佞臣^{ねいしん}（心のねじけた臣）の素首をはねて他への見せしめといたしとう存じます」

「それは誰のことか」

「安昌侯張禹^{ちやうう}でございます」

張禹^{ちやうう}は成帝の教育係として太子時代から仕えてきた者であり、この時は丞相を務めていた。だが

彼は王氏の威勢を怖れ、かれらの専横を見て見ぬふりをしている。これで天子の師といえるのか、というのが朱雲の言い分であった。

「無礼者！ おのれ、いやしい分際で朕の師を万座の中で侮辱する気か。殺しても飽きたらぬ奴、引つ立てて首をはねい！」

壇上より引きずりおろされそうになった朱雲は、なお諫言を続けようと必死に欄檻らんかんに取りすがつたが、へし折れた欄檻らんかんとともに庭前に転げ落ち、

「陛下、臣は地下において竜逢りゅうほう・比干ひかん（ともに古代の諫臣）と遊ぶ事ができれば満足でございますが、心残りは陛下の御代のことでございます」と叫びながら引つ立てられていった。このとき周しゅうりから諫められたので処刑は取りやめたが、のちに欄檻らんかんの修復の願い出があつたとき、

「直すには及ばない。直諫の臣の記念として残しておこう」といった。これは王氏の操り人形たるを潔しとしなかつた成帝の一面を物語る故事で、「折檻」という言葉のおこりである。

高祖より二〇二年経過の後、十一代哀帝が崩ずるや、先帝である成帝の母（太皇太后）が甥おうもうの王莽を召しだした。そして王莽は太皇太后の命で、元帝の孫（太皇太后の孫）を立てた。

孝平皇帝（平帝）という。わずか九歳であつた。幼主を立てたのは、王氏の手に政權を専有しておこうとしたからである。すかさず四年後に、王莽は自分の娘を平帝の皇后にし、翌年には平帝を毒

殺してしまった。

王莽おうもうは朝廷を意のままに操り、ついに紀元九年王莽おうもうは即位を宣して、国号を新しんとした。

第七章 後漢時代（十三代 一八六年）

王莽おうもうが帝位につき、新しんを建国して十四年経たころ、すでに天下は騒然としていた。各地で農民が一揆を起こして蜂起し、あるいは旗揚げをして、県官を殺したりした。そんな中に、漢の再興を願う、漢室の流れをくむ劉家りゅうけをかつごとくとする人たちもいた。その者たちにより、紀元二十三年に劉玄が漢の帝位についた。更始帝こうしていである。

同年、農民派によって統一された革命軍は、長安城内に突入して火を放ち、王莽おうもうの首級を更始帝に送った。ここに新は建国以来十五年で滅んだのである。

更始帝は凡庸で大酒のみ（だからみんなに担がれて帝位についたのであるが）のため人心は早くも更始政府を去っていった。

代わって帝位についたのが漢の高祖九世の孫、劉秀りゅうしゅうでこれが後漢の世祖光武帝こうぶである。

光武帝は洛陽に入城してここを都とした。前漢は長安に都にしたのでこれを西漢といい、これに對して、洛陽に都した後漢を東漢という。

光武帝から献帝までの十三代・約二百年にわたった後漢は、ほとんどの皇帝が幼くして位につき若くして歿したという著しい特徴があった。この間に宦官かんがん（去勢されて宮中の奥向きに仕える男）が政治表面に現れ、実権をもっぱらにする悪例ができた。後漢の末期、その宦官かんがんを誅殺せよとの気運が高まり、袁紹は兵を動かし、宮廷内になだれ込んで二千余といわれる宦官かんがんを片っ端から殺した。翌日、帝とその一行は、難を逃れて洛陽北郊にさしかかったとき、董卓の軍と遭遇。董卓はその天子と一行を守護して洛陽に戻った。洛陽に入った董卓は勢力を拡大していき、ついに、現帝を廃し、献帝けんていを擁立するまでに至る。

このようなふるまいに、地方に散った武将たちは、袁紹を盟主として反董卓軍を結成、董卓を脅かしたがうまくいかず、かえって群雄割拠を生み出し、天下は第二の戦国時代到来の兆しを見せ始めた。

一方董卓は都にあって天子を擁し、政治の権力を握った地位にありながら、政治を全く知らず、日毎に敵を作り、人心を失ってゆく。

王允おういんが呂布りよふをそそのかし、董卓とうたくを刺殺。

董卓とうたくの婿が弔い合戦で呂布りよふを追放。

後に仲間内でせめぎ合い、無政府状態となる。

第八章 三國時代（四十四年）

後漢の末期、無政府状態の中から頭角を現したのが、魏の曹操・蜀の劉備・呉の孫権である。以後、この三国による三つ巴の戦いは、壮大なドラマであるので、ここでは主な出来事と故事成語となった事情を記す。

「三顧の礼」

蜀の劉備が諸葛孔明を軍師に迎えるため草庵を三度も訪ねた。この故事から、賢者を招くために礼を尽くすことを言う。

「天下三分の計」

劉備が三度目に諸葛孔明を訪れ、会うことがなつたとき、孔明はこう言つた。

「曹操はよく謀はかりごとを用い、天子を擁して天下に号令していますのでこれと戦つても勝てません。南の孫氏は江東に起こること三代、人民もなつており、要害に拠よつて地の利を得ていますから、敵にまわしてはなりません。將軍（劉備）はここ荊州を取り、ついで益州を取れば、要害に囲まれ沃野千里の天府の国。この二つにまたがって内政を整え、武力の充実をはかつて、時の至るを待つのが上策です」と理路整然と天下三分の計を話した。

「赤壁の戦い」

曹操が長江沿岸に迫る。これをむかえ孫権が、同盟を結んだ劉備と共に長江赤壁に陣をしいて、

相対峙した。呉の大將黄蓋が「敵の船は船酔いを防ぐため、船が揺れぬようにつなぎ合わせています。火攻めにすれば一挙に撃滅できるでしょう」と周瑜しゅうゆに献策した。周瑜はそれを用い、手はずを整えた。あくる日、ここで黄蓋は大芝居をうつ。周瑜に対し「呉に降伏してはいかがでしょう」と進言、周瑜は顔色を変えて「おのれ士気を乱す不埒ふらちものめ、打ち首にせよ！」將軍達が驚いて、なだめたが周瑜の怒りはおさまらない。皆ひざまずいて、

「いま大將を斬るのは、それこそ士気に影響しますから、戦いがすんでからにしてください」と諫めたので打ち首だけはまぬがれ、その代わり棒刑百を食らわせることになった。黄蓋は棒で打たれ、全身血みどろになって引き下がった。

その夜、曹操のもとに黄蓋の降伏状が届けられた。曹操の軍に寝返って、恨みを晴らしたいというのである。曹操は考えた末、これを受け入れた。曹操の返事が黄蓋に届くと、黄蓋は、してやつたりと、よく乾いた葦や萩を満載にし、魚油をたっぷり注ぎ、それを青い布でおおった火船二十艘に、部下とともに分乗して曹操の船団に向かって漕ぎだした。

曹操は櫓の上からこれを見て、

「やあ、黄蓋が参ったぞ。これこそ天が我らに味方したもうたというものじゃ」傍らにいた大將が「あれは敵の計略と見受けられます。黄蓋は兵糧を奪って参ると申しておりますが、それなら

船足は重いはず、あの船はなにやら満載しておりますが、軽々と進んでくるではありませぬか」

曹操は、はっと悟って、

「誰ぞあの船を防げ！」

と下知したが、時すでに遅く、黄蓋こうがいの船団は間近に迫っていた。

と、突如その船からパツと火をふいたと見る間に、いずれも燃えさかる火のかたまりとなつて曹操の艦隊に突入した。魏の船はみな鎖で繋いである。おりからの東風で魏の船は燃え広がるばかり。

曹操の兵は逃げるだけで無我夢中、押しあいへしあいして、かろうじて陸地に上がつても、随所に周瑜・劉備の伏兵にあつて、さんざんに撃破された。

「赤壁」(袁枚)

【1巻の150頁】

「一面の東風百万の軍」は、赤壁の戦いで呉の周瑜

が東風を利用して、魏の船団を焼き、百万の軍を撃破したこと。「此の処三分を定む」はこの赤壁の地で諸葛孔明による天下三分の計は確定したこと。「漢家の家徳終に賊を焼き」の

「漢家」は、蜀の漢王朝。「家徳」は中国古来の五行思想に基づくもので、自然界と同じく、人間界の支配者も木・土・水・火・金の五元素の、いずれか一つの徳を担っていて(漢は火徳)、与えられた命数が尽きると、五元素の順に順次打ち勝つてその地位が入れかわる。というもの。「賊を焼き」とは逆賊、魏の曹操率いる船団を揚子江で焼き払ったこと。

「荻紛紛」は作者、袁枚が見た荻の葉は、赤壁の戦いのときに使われたものだったことを回想している。

「七歩の詩」

紀元二二〇年、曹操が六十六年の生涯を閉じた。曹操の長男曹丕そうひが即位する。

故曹操の大葬が終わると、相国の華歆かきんが曹丕そうひの前へ出て言った。

「三男曹植そうちの君には、父君の喪にも会し給わず、未だに即位の祝辞ありません。故に令旨を下して、その罪をお責めになる必要があります」

曹丕そうひはその言葉に従って、すぐ令旨を發し、使いを派してその罪を鳴らした。

曹植そうちのもとへ赴いた使者が帰り、その報告を聞くと、いたく曹丕そうひを憤らせた。

その理由とは以下、使者の談話である。

「私が伺いました日にも、うわさに違わず、曹植様そうちには前の夜からご酒宴のようでした。それはよいとしても、かりそめにも御兄上魏王の令旨を持つて参った使者と聞いたたら、席を清めて謹んでお迎えあるべきに、座も動かず、杯盤はいばん（酒を飲むさかずきと料理を入れる皿）の間へ私を通し、あまつさえ、臣下の者が使者たる手前に向かって『汝、みだりに舌を動かすな。そもそも先王さんしやご存命のとき、わが殿、曹植の君を太子に立てんと、仰せ出されたことがあったのだ。しかるに讒者ざんしやの言にさまたげられ、ついにそのことなく薨去こうきよせられたが、その大葬のすむや否、わが君に問罪を向けてよこすとは何事だ。曹丕そうひという君はそんな暗君なのか』と、いやはや口を極めて罵ります。ですからぜひなく令旨をお伝えしただけで帰って参りました」

曹丕そうひの嚴命を受けた許褚きょしよは、精兵三千余をひっさげて、直ちに曹植の居城へ殺到した。

「われら令旨の軍である」として重臣を始め、弟君の植をも捕縛して魏城に帰った。

重臣たちは殺されたが、曹植は母親の哀願で、死だけは猶予された。しかし華歆かきんが言う。

「ご舍弟の才能を周囲の者が担ぎあげると、後に大きな患いとなります。こうしてはどうでしょう。今ここに植の君をお呼びし、その詩才を試してみても、もしそれが不出来であればそれを口実に殺しておしまいなさい。噂の通りなら官爵かんしやくを貶おとしして遠地へ追い、詩文にのみ耽やからっている輩の見せしめにしたらよろしいでしょう」

曹丕そうひの召しに植は兄の部屋にひかれて来た。兄は弟に難題を突きつけた。

「植っ。室内を七歩あゆめ。もし七歩あゆむ間に、一詩を作らなければ、汝の首は八歩目には直ちに床に落ちているものと思え」

植は、壁に向かって歩みだし、愛吟した。「七歩の詩」である。

「七歩の詩」(曹植)【1巻の164頁】曹植は父の曹操、兄の曹丕と共に詩文に秀で魏

の三曹と称せられる。気骨のある天才的な詩人。この詩は曹植の本集には見えず、小説の「三国志」などに引かれている。本文も吉川英二の「三国志」から採った。

豆は曹植を表し、「本是れ同根より生ず」は豆と豆莢は同根。即ち兄弟の意。

「出師の表」

孔明が魏の重臣たちのうちで常に心を配っていたのは、司馬仲達であつた。魏で第一の人材とみなし、もし蜀にわざわざいをなす者があれば、必ず彼であろうと考えていた。その仲達が都を離れ、自らの願いで辺境の地、西涼の守備に赴いた。孔明はこの事を、蜀に対して行動を起こそうという準備に違いないと考えた。同じ愁いを抱く者が蜀にもう一人いた。馬謖である。

彼は孔明に進言した。

「仲達がみずから求めて中央を離れたことに、魏の内部に疑問を持つている者もあるようです。この際、仲達に謀反の心があるという噂を流し、魏の中央を惑わしてみてはいかがでしょうか」

その策は図に当たり、仲達は官職を剥がれて故郷に蟄居させられた。

これを知った孔明は、いまこそ魏を討って漢を復興すべき絶好の機であると考え、皇帝劉禪（劉邦の子）にたてまつる文を書いた。これが「**出師の表**」である。

「臣亮、言す。先帝、業を創むること未だ半ならずして中道に崩殂（天皇が死ぬこと）したまい、今や天下三分して益州罷弊す。これ誠に危急存亡の秋なり」

という言葉に始まる出師の表を、帝に提出し、孔明は三軍をひきつれて成都を後にした。

「蜀相」（杜甫）【3巻の158頁】蜀相や丞相は諸葛孔明のこと。

「三顧頻煩なり天下の計」は蜀の先主劉備が三顧の礼をもつて尋ねてきたとき、孔明が天下を治める大計を説いたこと。「両朝」は劉備・劉禅の両皇帝。

「師を出して」は、孔明が「出師の表」を提出して出陣したことから、兵を出すことの意。

「泣いて馬謖を斬る」

勝ちに乗じて、東進を続ける孔明と、これを迎え撃つ魏は、司馬仲達に二十万の兵を与えて祁山で対峙した。

孔明が一番の気がかりは、蜀軍の食料輸送路の要点である街亭の守りであった。誰にさせるか孔明が苦慮していると、私がその任に当たりたい、と願い出た者が馬謖であつた。

馬謖はこれまでの戦いにもしばしば殊勲をたて、孔明はひそかにその大成を楽しみにしていた。しかし仲達とまともに対戦させるには、彼はまだ若い。孔明は危うんだが、馬謖は懇願した。

「必ず守り通します。万一敗れるようなことがあれば、わたしの身はいうに及ばず、一族すべて厳刑に処せられるとも恨みません」

馬謖は勇んで孔明の命を受け、街亭へ急いだ。

街亭の山は三方が絶壁になっていた。孔明の命令は、山麓の道を死守して魏軍を寄せ付けな、

ということであつた。

だが、街亭の地形を見た馬謖は、敵を引きつけて逆討ちを食らわせるには絶好の地形であると考へ、山上に陣をかまえた。

この防備を見た仲達は、山上の蜀軍への水を断つ為に、街亭の山を幾重にも囲んだ。

馬謖がそのことに気づいたときはすでに遅かつた。馬謖は全軍をもって山を駆け下りた。仲達はわざとこの窮鼠きゆうそを通し、蜀兵が山を下りきるのを待つてこれを討つた。

孔明は街亭敗戦の責を問うて馬謖に斬罪ざんざいを申し合わせた。国家多難の際、馬謖のような有能な士を失うことは大きな損失であるとして、助名を請う者もいたが、孔明は聞き入れなかつた。

「馬謖を失うことは国家の損失かも知れぬ。しかし馬謖を斬らないことは、さらに大きな損失をまねくことになる。惜しむべき者であればこそ、断じて斬つて大義をつらぬかねばならぬのだ」

馬謖が刑場へひかれてゆくと、孔明は顔を袖でおおい、床に伏して泣いた。

「馬謖よ、許してくれ。本当の罪はわたしにあるのだ。だが、わたしは自ら首を刎ねるわけにはいかない。なぜなら、わたしは生きて蜀の為に、おまえの死を活かすことをはからねばならぬからだ」馬謖の首は陣中にさらされた。全軍の将士は、孔明の心情を知って、ひとりとして涙しない者はなかつたという。「泣いて馬謖を斬る」は、「私情にとらわれずに法を正す」意味に使われる。

「死せる孔明 生ける仲達を走らす」

紀元二三四年、孔明が魏軍と対戦するため、六度目の祁山きざん出陣を決行。双方持久戦となり、孔明は持久戦に有利な五丈原に陣地を移す。

秋八月孔明は病にたおれ、二十三日に死んだ。蜀軍は孔明の遺命を守って喪を秘し、ひそかに一軍ごとに引き上げを開始した。

仲達は蜀が撤退の準備を進めている旨の復命を聞くと、直ちに全軍に総攻撃の命を下す。仲達は自ら先頭に立って追撃を開始。しばらく行くと、どっと喚声がおこり、前方の山から四輪車を先頭に押し立ててくる軍団が見えた。車上に指揮をとる姿は、なんと孔明であった。

「謀られたか」仲達はひるんだ瞬間、四輪車のかたわらから槍をかまえて飛び出してくる一騎あり。姜維きやういだ。

「司馬仲達、逃げるか！」

その声とともに仲達は、馬首を転じて逃げ出した。他の諸将もみな孔明の策略に落ちたと思い、仲達に続いて逃げ奔はしった。

四輪車の上にあるはもとより孔明ではなく、孔明がみずからの死後を慮おもんばかって作らせた、自分の木像であった。

孔明の死後、蜀は姜維きやういによって守られたが三十年後、二代四十三年で滅んだ。

第九章 西晋時代（四代 五十二年）

魏では、蜀を滅ぼした二年後、司馬仲達の孫である司馬炎は、魏帝（元帝）を退けて帝位に就き、国号を晋と称して洛陽に都した。これが西晋の武帝である。

武帝は呉国を攻め滅ぼし、西晋を建ててから十六年にして中原制覇を成し遂げる。

しかし三代天子懷帝の時には、相次ぐ争乱に疲弊した晋室の衰運に乗じて、今度は「五湖」の名をもって呼ばれる西北の異民族が、中原の諸地方を蹂躪し始める。「五湖」とは匈奴（蒙古地方を根拠地にした遊牧騎馬民族）・羯（匈奴の別種）・鮮卑（蒙古ツングース族）・氐・羌（ともにチベット系部族）の五族である。

中でも匈奴の酋長劉淵は漢王と称し、子の劉聡になると晋都洛陽を攻め落とし、懷帝を捕虜とし、市街を焼き払い、殺戮暴行の限りをつくした。帝は二年の虜囚の生活後、弑殺される。

五代愍帝も同様に、匈奴軍により殺戮暴行がくりかえされた後、殺された。

西晋が滅ぶと、黄河流域の中原の地は異民族の手中に帰し、いわゆる五湖十六国の乱立から北朝諸国の興亡盛衰となる。

一方江南の地にあつては、西晋宗室のひとりである司馬睿が東晋の国を建て、南朝興亡の歴史が続くのである。

第十章 東晋時代（十代 百年）

劉聰^{りゅうそう びん}が愍帝を殺すと、晋では瑯琊王^{ろうや えい}睿^{けんこう}が建康（南京）で帝位についた。これが元帝^{げん}である。

これより以後を東晋^{とうしん}といい、前を西晋^{せいしん}という。

翌年、劉聰^{りゅうそう}は病死し、太子の粲^{さん}が位についたが、間もなく粲^{さん}は殺される。このことにより内部に紛争が起きた。これ以降に蛮族諸国の消長が始まるが、その結果、天下は晋・秦・燕三勢力^{ていりつ}鼎立（三者が分立する）の形になった。

秦の苻堅^{ふけん}は即位すると、広い地域に勢力を拡張し、いまや北方の覇者となった。

晋を討つことが念願だった苻堅^{ふけん}は、周圉^{しゅうい}の諫めにもかかわらず、遂に晋討滅の軍を出発させた。これに対して晋は、北府軍で応戦、淝水^{ひすい}の戦いで秦は敗北する。

この事態が歴史に一つの転機をもたらすことになる。

即ち、この戦いによって、異民族は南下の野心を断ち切られ、漢民族は江南を安住地として確保することができたことになり、南北朝的な体制をはっきりさせたことである。

晋室も九代孝武帝は、酒と女色の味を覚え、政治は一切任せきり、遂にはアルコール中毒になり挙句の果てに寵愛した張貴人^{ちきう}に殺される。直ちに太子が即位した。安帝^{あん}という。

この安帝の白痴ぶりは、現代流に言えば精神薄弱児である。この帝も、やがては北府軍の將軍、劉裕^{りゅうゆ}の手によって縊^{くひ}られ死んだ。

第十一章 南北朝時代（二七〇年）

劉裕りゆうゆうが東晋とうしんを滅めぼし国号こくごうを宋そうと称しょうして北方ほくほうの魏ぎと対立たいりつしてから、隋ずいが南北なんぼくを統一いつしするまでの約

一七〇年間を南北朝時代という。

南北対立の形は、すでに東晋の始めからあらわれていたが、明確に二大勢力に分かれて対立するようになったのは宋の建国以後である。

南朝（宋）

宗・魏両国は、その後も互いに北進・南下の機を伺いながら、国境沿いの領地奪い合いが続いた。宋の六代、明帝が死んだあと、頭角をあらわした蕭道成しょうどうせいが即位し、齊せいの高帝こうていとなる。

宋は建国六十年で滅ぶ。

南朝（齊）

齊の高帝も在位四年で死んだ。後の帝位後継をめぐり骨肉相食む悲劇が展開されたが、蕭鸞しょうらんの主導で明帝は毒殺され、齊も二代十四年で滅亡する。

齊の明帝蕭鸞しょうらんが死んだあと、太子、宝卷ほうかんが即位するが、この宝卷ほうかんが大変なバカ殿様で、国事は任せきり、遊び暮らして百官を接見することも無かった。

このままでは、何事か起こらずにすむはずはない・・・心ある人々はその時に備えてそれぞれの保身と天下をねらう準備を始めていた。

その一人、蕭衍は都に近づかず、兵力を蓄えて、朝廷に混乱のおこるのを待っていた。そして、それは待つほどもなくおこった。帝の後継問題で生じた抗争を利用して蕭衍は禪讓の形式（帝は翌年蕭衍に殺される）で位を譲り受け、梁を建てた。即ち梁の武帝である。

南朝（梁）

梁朝の命運はおよそ四代五十五年、その内、はじめの四十八年間は初代武帝（蕭衍）の治世であり、南朝百八十年の歴史を顧みても、これほど長い寿命の天子は他に類例がない。これは歴朝の創業天子の多くは、戦陣の間に身をおこし学問文芸の教養を欠く、粗野な武人天子であったことに對比すれば、武帝には仁君であり文人天子であったことにおいて希少価値が認められるであろう。

南朝随一の黄金時代とまで称されたこの後、東魏の侯景の起こした乱により、その災禍が武帝の身に及ぶ。その乱の経緯は、次の通りである。

北魏が東西の両魏に分裂したのは梁建国後三十年頃（534）である。その東魏の実権者である高歡の信任を得て、一兵卒から將軍までのし上がったのが侯景である。侯景は、武帝の甥の臨賀王蕭正徳が武帝の信用を失い、叛心を抱いていることを知ると、それを利用して近づき、内通の約束をとりかわし、武帝側近の奸臣を誅する名目で兵をあげ、武帝を廃したが、すぐに武帝の第四子（元帝）に廃される。最後には元帝の武將陳霸先が、敬帝（元帝の長子）の禪讓をうけて帝位につく。これが南朝の第四王朝、陳の創業主となった武帝その人。梁朝は名実ともに滅亡した。

南朝（陳）

陳の宣帝になると、北方では北齊と北周とが二大国として肩を並べ、南の陳とともに天下を三分していた。陳は長江江北の齊を攻め、最大拠点の寿陽じゅやうをおとし入れる。しかし、北朝で、齊を滅ぼした周が隋を建国し、その七年後に陳は隋に攻められ亡びる。（588）

かくして陳は武帝より五世、およそ二十二年をもつて滅んだ。

北朝（北魏）

北魏の孝文帝は、積極的な漢文化政策を採った。元来、北方民族には固有の文化がなく、中国の文化に憧れていたこともあるが、北魏が全国統一を成し遂げた場合、中華民族からえびすというレツテルでさげすまれている野蛮さを払拭して、中華民族と同等の立場に立つ必要があった。

更に、都を洛陽に移した。洛陽こそは、古来中原を抑える要の地であったからである。

しかし、孝文帝が崩じ宣武帝が即位した頃から国運は下降線をたどり、次の孝明帝となるに及んで衰亡の兆しが著しくなった。

孝明帝は即位の時六才、従つて国政の実権は、生母の靈太后れいこ胡氏この手にゆだねられた。このあと政権を握つて専権ぶりを發揮した靈太后れいとそれを肅清すべしという改革派との対立が生じた。

改革派の中に高歡こうかんなる者があつた。彼はめきめきと勢力を上げ、大丞相の位についたとき孝静帝こうせいを擁して東魏の国を立てた。（534）一方、高歡こうかんからの難を逃れた孝武帝は、宇文泰うぶんたいを頼り宇文泰うぶんたい

を大丞相として国を保った。しかし宇文泰はすぐ孝武帝を毒殺し、ここに北魏は滅んだが、孝武帝のいとこにあたる文帝を擁立し、西魏の国を建てた。

北朝（東魏・西魏）

北魏が東西両魏に分裂したが、後に東魏は高洋こうように国を奪われ北斉となり（550）、西魏は宇文覚うぶんかくのために国を奪われて北周（557）と改めるに至る。

北朝（北斉）

北斉を強大ならしめたのは二代高演（孝明帝）で、陳の文帝と時を同じくして就いた。この帝の前後は兄弟が即位しているが、両者とも酒乱、嗜虐しぎやく、不倫ぶりが十八史略に書かれているが、読むに耐えないほどである。まさに、悪逆無道の標本のような人物であった。

四代天子高緯こういの時、陳の侵攻を受け、拠点寿陽じゅようが陥落したことが伝わっても、高緯こういはのんきにも、女色を喜び、酒に酔いしびれるばかりの退廃した朝廷となっていた。それともう一つ、朝廷内には漢人の重臣と胡人（つまり高氏と同族のもの）の間の不和が高まったこともあげられる。こうなるともはや斉も存続はむつかしく、周の侵攻に対し戦意なく屈した。

北斉は五世、三十年にしてここに亡びた。（577）

北朝（北周）

北周を建てた宇文覚うぶんかくは、建国する前は年少だったので、従兄の宇文護うぶんごが補佐をつとめ、北周朝は

しばらく宇文護の指導で進む。が、そのやり方が独裁的で権力を欲しいままに進めたので、武帝の手によって殺された。

南朝陳が北斉に大勝した翌年、武帝は大挙して北斉討伐軍を繰り出して斉を滅ぼした。

武帝の後が宣帝でその太子闡は、まだ赤ん坊であつたので後見役に祖父（母の父）の楊堅が務めた。楊堅の娘が武帝の太子賛（後の宣帝）の妃となり、やがて宣帝の皇后となつたからだ。こうなると、おのずと楊堅は朝廷内の実力者にのし上がる。ついに幼帝が即位した二年後に幼帝（静帝）の位を禅譲され、隋帝と称するに至つた。諡を文帝という。

隋の建国は五八一年、北周の命脈は五世、二十五年であつた。

楊堅は、南朝陳の宣帝の死後六年経て南征の詔を下した。南朝陳が滅んだ。

そしてここに、魏晉の興亡に始まり、五胡入り乱れ、南北対立して抗争を続けた、大動乱期も終止符をうったのである。四百年ぶりの中国の統一だつた。

第十二章 隋王朝（二代 三十年）

隋の文帝楊堅の皇后は獻皇后であるが、六人の子供すべてこの皇后との間に生まれた。このようなことは異例のことで中国史上において他に例がない。これは皇后のなみはずれた嫉妬心が主因らしい。

文帝は次男の広を太子に立てたが、この太子は野心家で陰謀家であつた。権力を一身に集めたかつ

たため、兄弟を次々斃し、ついには毒牙を父の文帝までのばした。

こうして広は二代の帝位につき煬帝とした。

煬帝は国威をおおいに伸長したが、裏を返せば、民衆の多大な犠牲の上で行われたことで、次第に煬帝への恨みの情が表面化してゆく。隋の疲弊が明らかになると叛徒の蜂起は全国化するに至った。その背景の中から登場するのが李淵である。

李氏は五胡十六国※の一つ、西涼という小国の末裔である。李淵は唐公と呼ばれ、兵を長安に向けて発した。唐公の軍、即ち唐軍はゆくゆく吏民を慰勞し諸叛徒を収容しながら長安に入った。

淵は代王侑を迎えて帝位（恭帝）につけ、煬帝を太上皇とし、自らは唐王・大丞相に任ぜられ、翌年、煬帝が絞殺されると、恭帝は帝位を守れず、李淵に譲った。唐王朝が成立する。

ちなみに聖徳太子が小野妹子を使節として「日いづる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」という文書を送った相手はこの煬帝であり、これが、我が国と中国との正式の交際の初めであった。

※注 西晋末から南朝宋までの約百三十年間、五胡（五つの北方民族）が、十六国を建てて興亡した。

第十三章 唐王朝（二十代 二九〇年）

李淵りえんが、唐の高祖として即位すると長子の建成けんせいを太子に立て、次子の世民せいみんを秦王、末子元吉げんきつを齊王に封じた。

李淵りえんが長安を制しても各地には、煬帝ようだいを絞殺した宇文化及うぶんかきゅうや、煬帝ようだいの孫を帝として仰ぐ王世充おうせいじゅうのほか多くの者が王と称して起こり、まさに群雄割拠の状況が訪れた。

しかし高祖は、建国七年後には、ひとまず国内の戡定かんてい（戦争に勝って平定する）が成った。が、その頃には、太子の建成けんせいと末弟の元吉げんきつが組んで、秦王世民せいみんと対立して、不俱戴天ふぐたいてんの関係まで進展していった。その結果、世民せいみんは建成けんせいと元吉げんきつを殺し高祖の譲りを受けて位についた。

これを太宗皇帝という。

太宗は、外地侵略に異常な野心を示し、その治世二十三年間に、東は朝鮮・満州、南は交趾こうち、西は西藏チベット、北はバイカル湖辺までその勢力圏を拡大していった。

第六代玄宗皇帝げんそうは楊貴妃を寵愛するあまり、天下を傾けるまでに至ったが、この時期は盛唐と呼ばれ、唐代詩文学の最盛期でもあった。

唐代の詩文学は、装飾的な詩を受け継ぎながら、詩形の形式的な完成がめざされた。五言律詩の完成がそれである。五言律詩だけではあきたらずに七言律詩、五言・七言の絶句、そして五言・七言の古詩というふうに、さまざまな形式を創造する。まさに、詩花繚乱の時期となった。

唐詩の詩風の変遷については、初唐・盛唐・中唐・晩唐という四期の区分で考えられている。各区分ごとに作者と作品を整理してみよう。

【初唐】（六一八～七一二 約百年）

駱賓王

「易水の送別」

沈佺期

「古意」「竜池篇」

【盛唐】（七一三～七六五 約五十年）

李白

（詩仙）「鸚鵡洲」「客中行」「峨眉山月の歌」「月下独酌」「静夜思」「山中間答」

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「山中にて幽人と対酌す」「秋浦の歌」

「春夜洛城に笛を聞く」「子夜呉歌」「早に白帝城を発す」「天門山を望む」「烏夜亭」

杜甫

（詩聖）「春望」「登楼」「貧交行」「絶句」「笛を吹く」「曲江」「蜀相」「登高」

孟浩然

「春暁」

王維

「元二の安西に使用するを送る」

崔顥

「黄鶴楼」

岑参

「磧中の作」「京に入る使に逢う」

王昌齡

「出塞行」「從軍行」

王之涣

「涼州詞」「黄鶴楼に登る」

【中唐】（七六六〜八三五 約七十年）

韋応物 いおうぶつ

「秋夜丘二十二員外に寄す」 「滁州の西澗」

柳宋元 りゅうそうげん

「江雪」

錢起 せんき

「帰雁」

韓愈 かんゆ

「左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す」

白居易 はくきょい

「酒に対す」 「菊花」 「夜雪」 「慈烏夜啼く」 「暮立」

【晚唐】（八三六〜九〇六 約七十年）

杜牧 とぼく

「山行」 「江南の春」 「烏江亭に題す」 「清明」 「秦淮に泊す」

第十四章 盛唐・中唐の詩人たち

唐代の詩人のなかで李・杜・韓・白と並び称することがある。李白・杜甫・韓愈・白居易である。この四人の生涯を追ってみる。

李白

生まれは、玄宗皇帝が即位する十一年前（701）で、王維 おうい もこの年に生まれている。

母がみごもった夜、夢に太白星（金星）を見たので、名を白、字を太白 あざな と名づけたという。

家系や出身地、あるいは人間関係等については、すべて定かでなく、天来の詩人とでもいったかっ
こうで、歴史の上に姿を現すのである。

李白を玄宗に推挙したといわれる賀知章^{がちしょう}が、李白を見て謫仙人^{たたく}（天界からこの世に流謫されている仙人）と評したが、その文学が仙骨を帯びていたということだけではあるまい。どこか人界離れた形容しがたい何かがあったと思われる。

少年時代は読書と剣術に励み、十歳には詩書・百家に通じたという。

二十歳のとき諸国漫遊の旅に出る。この旅立ちに際し、あの有名な「峨眉山月の歌」を作ったとする説がある。

長安での生活は、日々飲み仲間と飲み遊ぶことであつたらしい。こんな話が語り伝えられている。玄宗は牡丹を愛好し、花の盛りのある日、楊貴妃をともなつてここに遊んだ。玄宗は李白を召し出させて、三章の詩を即座に作るよう命じた。

その時、李白は寧王（玄宗の兄）に呼ばれていて、すでにひどく酩酊^{こうけい}していた。両肩を抱えられて現れた李白は、傍にいた宦官の高力士^{こうりきし}に靴を脱がせ、瞬く間に三つの七言絶句を書き上げた。

楊貴妃の美しさを歌ったこの詩は、楊貴妃を喜ばせたが、傍若無人な態度で仕打ちを受けた高力士^{こうりきし}は面白くなく、楊貴妃に讒言した。これを真に受けた楊貴妃は、玄宗をそそのかし、李白を都から追放してしまった。

李白の長安生活はわずか三年で終わりを告げ、ふたたび放浪生活が始められる。長安を出た李白

はその時、洛陽にいた杜甫の訪問を受けた。杜甫は李白より十二歳下の三十三歳。

李白はすでに天下に名の知れた大詩人である。李白に会った杜甫は、飄々たる仙骨に、ひと目で魅せられてしまい、その後しばらく李白の供をして旅をした。

この二人の大詩人の出会いは中国文学史上の記念すべき出来事である。

李白の晩年は寂寥を極めたもののようだ。「秋浦の歌」は、晩年暮らした秋浦で作ったものとされる。所伝によれば、李白は揚子江に遊ぶのを常としていたが、ある日いつものごとく船を浮かべて酒を酌んでいた。ふと江上に映る月影をすくおうとして、江中に歩みだし姿を歿したという。

杜甫

杜甫の出身地は洛陽に近い河南省鞏きやう県である。父方は儒者として文句のない家柄である。母方の家系は唐代名門の貴族、崔氏さい。崔家と唐の王室とは婚姻関係にある。

幼少から青年期にかけての生活は、開元という良き時代にあつて幸福であつたに違いない。

青年期の杜甫は、当時の若者がやったように、諸国の漫遊を試みた。

杜甫三十三歳の時、前述した李白が長安を追われて洛陽を通った。そこで杜甫は李白を訪問した。

その後二か月ばかり、李白と詩を語り、仙を語りあつて痛飲し、あるいは薬草を求めたり、狩に夢中になったりして、各地を放浪した。

三十五歳で長安に出たが、仕官の望みは、なかなかかなえられなかった。生活も毎日の米に事欠

く程貧しかった。妻子を養えなくなった杜甫は、妻の親族に妻子を預けた。

その直後、ようやく官を拝したばかりの杜甫であるが、それも束の間、安祿山が反乱の軍を起こしたのである。

肅宗が靈武で即位した報を受けとり、靈武へ出発したが途中で賊に捕らえられ、すでに陥落した長安に送られ監禁されてしまった。有名な「**春望**」はこの時の作品である。

長安が回復して肅宗が還都すると杜甫も長安に戻って来た。そして再び左拾遺さしゅういの職を授かる。しかしそれもわずかな間で、華州に左遷されてしまった。「**曲江**」はこの頃の作品。

翌年には職を辞して、官吏生活とは袂を絶った。理由は知り得ないし杜甫も語っていない。

時に四十八歳。苦難の生涯が始まる。彼は旧友の嚴武げんぶが節度使をしている成都に向かった。成都の郊外、浣花溪かんかけいのほとりに草堂を建てしばらくここに落ち着くことができた。

晩年、嚴武げんぶが急死すると杜甫は成都を離れ揚子江を下り、夔州きに二年間滞在。「**登高**」がこの頃の作品である。

夔州きを去って、弟のいる荊州に向かい、岳州に下り、洞庭湖を渡って、更に南下するが、その間詩を作りながら、まったくあてはずれ、ちぐはぐな旅が続くのだ。

洞庭湖から漢北を望みつつ、遠い故郷をめざして湘江じやうきやうを北へ向かったようであり、そしてこの辺りのどこかの江中で、不遇な生涯を閉じたのだ。西暦七七〇年、五十九歳の冬である。

韓愈

韓愈は字を退之^{あざな たいし}といい、河北の昌黎^{しょうれい}をその本籍とするところから韓昌黎^{かんしょうれい}とも呼ばれる。二十五歳で科挙の試験に及第し、進士となった

彼の詩を評する者はいは「文を以つて詩と為す」といい、あるいは「醜を以つて美と為す」という。要するに彼の詩は、その散文化されたスタイルと人の意表をつく発想・用語の妙によって、人生の諸相を鋭く洞察し、描写しつくした点に、唐詩の常套を脱し、新生面を開いた中唐詩人としての特色が見られる。

人口に膾炙した「左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す」【1巻の138頁】の一首は、韓愈五十二歳で、刑部侍郎の官にあつたときの作であるが、その内容は以下の通りである。

時の天子憲宗^{けんそう}に「仏骨を論ずるの表」を奉り、憲宗が仏教に心酔して仏骨（仏舍利）を宮中に奉迎しようとしたことの非を諫めた。そのため天子の激怒を買ひ、潮州に左遷される途次、都の長安からさほど遠からぬ藍関で、見送りに来た姪孫^{てっそん}すなわち兄弟の孫である韓湘^{かんしょう}に、この詩を贈った。

韓愈にまつわる故事があるので紹介しよう。

「推敲」

韓愈の周囲に集まつた詩人も多く、また多士濟々。その中に韓派の詩人の代表として推すに、最もふさわしい一人、賈島^{かとう}という者がいた。韓愈が京兆^{けいちよう}の尹^{いん}（長官）であつたころ、賈島^{かとう}は長安の都

大路を驢馬ろばの背に揺られながら詩句に夢中であつた。三句目まではスラスラいったが、四句目の「僧は推す月下の門」で**推**すか**敲**くかで迷つた。考へに夢中になっているうちに、ちやうど外出途中の韓愈の行列に、驢馬の鼻づらが突つ込んだ。警護の武者が狼藉者として賈島かとうを驢馬から引きずり下ろし、韓愈の前に引き立てた。賈島が事情を話すと、韓愈は「それは君、もちろん敲たたくだよ」と言つた。このことから、「**推敲**」は、文章などを何度も練りなおすことの意として使われる。

白居易

字は樂天、陝西下邳あさの人。二十八歳で進士に及第した。この時同じく及第して、終生の友となる七歳下の元稹げんしんがいた。白居易は諸官を歴任し、刑部尚書をもつて致仕ちし（官職をやめる）した。四十四歳のとき、事によつて江州の司馬に左遷されたのを除けば、彼の官界生活はおおむね無事順調に過ぎられたといつてよいであろう。

彼の詩名を一躍天下に高からしめた、玄宗と楊貴妃の情愛をうたつた「**長恨歌**ちやうこんか」は三十五歳の作。三十八、九歳、翰林学士から左拾遺さしゅうい・京兆府参軍に除せられた京官時代には「**新樂府**しんがふ」五十首、「**秦中吟**しんちゅうぎん」十首がつくられている。

後來かれは自らの詩編を品評して、諷諭詩・閒適詩・感傷詩・雜律詩の四種に分けた。うち諷諭詩とは「上は詩を以つて時政を補たすけ察はかり、下は歌を以つて人情を洩あらし導く」という主張から発す

る時政諷刺・社会批判の詩で、前記の「新樂府」・「秦中吟」がその代表作であり、かれ自らも自負するように、これら諷諭詩をもつて詩人白居易の本領を發揮したものだといえる。

後年宋の蘇軾そしよくは元稹げんしん・白居易はくきよいを評するには「元輕・白俗」の語をもつてした。この語はもとよりまともな褒めことばではないけれど、輕易・平俗を旨とし、日常的な用語と発想によって人生の諸相を描き詠った、元白一派・・・その活躍の中心時期が元和年間げんわ（806～820）であつたところから、元和詩派とも呼ばれる・・・の特色をよく言い当てている。かれらは正にその詩の輕易平俗さにおいて、中唐詩壇に新風を吹き込んだ人たちであつたのである。

唐も中唐期の政治面においては不振をきわめるようになり、ひいては唐朝を衰亡に導いてゆくことになる。その原因の一つが藩鎮はんちんの台頭である。

七代肅宋しゆくそうの時に起こつた安祿山あんろくざんの乱と、続く史思明ししめいの乱で疲れた朝廷は、節度使に元賊將たちを任じた。これがいわゆる「藩鎮」で、地方軍閥として次第に強大な力となり、やがて大きなわざわざいをなすに至る。

いま一つの原因が宦官かんがんの専横にあつた。唐朝のはじめは宦官かんがんの数も少なく仕事も軽いものであつた。ところが、則天武后そくてんぶこうのころから数が増え、その数三千人を超えるようになった。

こうなると位が上がる者もあり、遂には大臣をもしのぐ勢力を振るうに至つたのだ。

九代徳宋以後は、宦官が兵権をにぎり、政治の枢機にも参画して、天下を揺さぶる程にのさばり始めた。

唐末に至って、官僚の間にはげしい派閥争いがあり、宦官の勢力とからみあって、政情をいつそう複雑怪奇、不安定なものにして、唐朝の瓦解を内側から助長したのであった。

かくして唐末の大乱を経て、時代は朱全忠を中心（しゅぜんちゅう）に動きはじめていた。

朱全忠（しゅぜんちゅう）は昭宗（せう）に逼（せま）つて、自分の拠点洛陽に遷都させ、ついで帝を殺し太子を立てた。哀帝（あい）である。更に全忠は帝に讓位（じやうゐ）を強（し）い、帝位を踐（ふ）んで国を梁（りやう）と号した。

第十五章 五代の世（約五十年）

朱全忠（しゅぜんちゅう）は帝位につき、国を梁（りやう）と号した。後梁（こうりやう）の太祖である。ここに唐は滅び、これより約半世紀の間に、後梁（こうりやう）（三主、三十七年）・後唐（こうとう）（四主、十四年）・後晋（こうしん）（二代、十一年）・後漢（こうかん）（二代、四年）・後周（こうしゅう）と五つの王朝が目まぐるしく交替する、いわゆる五代の世に入るのである。

ただし、右にあげた五王朝が支配し得た地域は、黄河流域に限られ、南には呉（ご）・南唐（なんとう）・呉越（ごえつ）・楚（そ）南漢（なんかん）・閩（びん）・前蜀（ぜんしよく）・後蜀（こうしよく）・荆南（けいなん）が、互いに滅ぼし滅ぼされして割拠し、北には北漢（ほつかん）が太原に都していた。これらを総称して五代十国ともいう。

これら諸国の君主は、ほとんどが唐末の節度使である。唐末において、節度使はすでに各地に割拠して、さながら一王国の觀を呈していた。五代十国はその継続にすぎないということができる。

後周の二代目君主、世宗は五代でも最も傑出した君主と言われる。在位六年で大いに版図を拡大し天下統一への足固めをした。

世宗のあとには七歳の皇子梁王宗訓そうくんが立った。恭帝である。この幼帝の即位は、おのずから人心を節度使である名将趙匡胤ちようきよいんへと向かわせることになった。天子が幼少で実際の任務に耐えぬようなき、実力第一等の武将が配下の将兵に推されて帝位を奪うというのが、五代の時代のならわしだったからである。

恭帝から帝位の禅譲が行われ、趙匡胤ちようきよいんが第一代の天子（太祖）となり国号を宋と名乗った。

第十六章 宋王朝（北宋）（九代 一六六年）

太祖趙匡胤ちようきよいんは、五代随一の名君だった世宗が嘗々辛苦して樹立した国をそっくり頂戴し、それを基礎にして宋朝を発展興隆させたのだから、創業の主としては幸福な天子だったと言えよう。なぜなら、すでに世宗の代には、揚子江以北の地はほぼ後周の勢力下に入っていたし、内政面においても、武人の権力の弱体化と中央集権的な独裁への方向が取られて、かつ、経済的な安定も保たれていたからである。

国を起こして十六年後、五十歳になった太祖は、にわかに病にたおれ、重態に陥った。

臨終の床には皇后と王子がいたが、やがて弟の晋王も駆け付けてきた。太祖は他の者を部屋の隅にしりぞけ、晋王を枕元に招いて、なにやらしきりと口を動かしていた。やがて晋王が寝台から少

し離れたかに見えたかと思うと、太祖がいきなり傍に置いてあった大斧を引き寄せ、床を討ちつけ大きな声をはりあげた。

「こうするのだぞ！」

そして、ぐったりと息絶えた。

皇后はハッと顔色を変えた。そしておののきながら、晋王を見て、

「この子たちと私の生命は皆あなたに差し上げます」とつぶやくように言った。晋王は答えた。

「姉上、ともに趙家の富貴を保つのみです。心配なさらぬよう」

晋王は第二代の天子太宗となる。

それにしても、太祖は晋王に何を話したのか、太宗の斧は何を意味するのか、史書はそれについて何も語っていない。臨終のこの事件は不得要領（曖昧でよく分からない）などところがある。

ある史書はこんなことはなかったものと抹殺するが、一説には太祖は太宗に殺されたのだ、という。太宗は太祖の死後、太祖の二人の子を虐待し一人は自殺、一人は殺されている。そして位は自分の子に譲った。だから十分疑うに足りるというのである。

「一網打尽」

四代仁宗^{じん}は、杜衍^{とえん}を宰相にしたときがある。衍^{えん}には進奏院の監督をつとめている蘇舜欽^{そしゆんきん}という媚がいたが、この蘇舜欽^{そしゆんきん}が反故紙^{ほこ}を売り払った公金で神を祀^{まつ}り、その際、役所に客を招いて、妓をは

べらせてどんちゃん騒ぎをやったのである。好餌とばかり飛びついたのは反党人派の御史中丞王拱おうきよう。さっそく弾劾して、遂に蘇舜欽そしゆんきんの一味徒党はことごとく獄につながれた。あまりの嬉しさに、王拱は得々としていったものであった。

「吾一網に打去し尽くせり！」（おれはひと網で残らずかぶせたぞ）と。

「一網打尽」のおこりである。

保守と革新の政争

宋の三代真宗のとき、契丹きつたん（東北部の種族）の大侵攻を受け、屈辱的条件の「澶淵の盟」※を押し付けられ、ようやく和を講ずることができた。

※注 契丹きつたんに毎年銀十萬兩・絹二十萬匹を贈ることの盟約

また、四代仁宗の時には西夏せいしか（北西部を支配している国）から国交断絶と宣戦布告を突きつけられた。この状況をみて契丹きつたん、すなわち遼りようは突如土地（ほぼ山西省全域）の割譲を要求してきたのである。このような窮地に追い込まれながら、宋の五代英宗えいそう当時は、国家財政は窮乏を極めていた。

原因の第一は、兵員の増加、第二に冗吏じようり（官位のみあって職務の無い役人）の増加、第三に歳幣さいへい（契丹きつたん・西夏せいしかなどに贈る金額）の増加、である。このような状態の中で、英宗は財政の立て直しを図ったが在位わずか四年で病没してしまう。英宗の後を継いで、長子が十九歳で即位した。

これが六代神宗ある。かれは英宗の意思を継ぎ、革新への道をひたすらに歩みだした。

英宗が革新への道を歩みだし得なかったのは、保守的な重臣たちに取り巻かれていたためと悟った神宗は、革新政治を推し進めるべく**王安石**を中央に迎えた。

宰相までなつて名実共に政治の実権を握ったかれは、次々に新法を実施していった。

ところが神宗が歿し、哲宗が九歳で即位すると、政治の実権は**宣仁太后**（英宗の皇后で、哲宗の祖母）が握った。旧法派の**宣仁太后**は、保守派の**司馬光**を宰相に迎え、次々に新法を廃止していった。これを「**元祐の政変**」という。

新法の廃止を断行した司馬光も宰相にあることわずか八か月で病死した。

哲宗の即位から八年後、**宣仁太后**が死んだ。哲宗の親政が始まった。かれは新たな決意をもって新法の復活に踏み切り、年号を紹聖と改め、旧法派の**蘇軾**らを罷免し、新しい人材で新法紹述（前の人の事業を受け継いでそれに従って行う）の業に当たらせた。

いわゆる「**紹聖の政変**」である。

この政変によって新方派と旧法派は、再び攻守そのところを変えるにいたった。

だが、政局は間もなく、またしても転変する。

哲宗が親政七年目にして病死し、嗣子の無いまま弟が即位して、八代目徽宗となる。徽宗はその時十九歳。年少であるうえに文弱であるとして、母の向太后しやうたうが摂政の座についた。

向太后しやうたうは、新法・旧法両派の争いが国家の衰亡に導くことを恐れ、両派を折衷して中正の政治を行なおうとした。が、このような折衷的手段では、多年にわたる両派の確執を解消することはできなかった。しかも向太后しやうたうは、摂政の座にあることわずか一年で病死し、またもや政局は転変する。

向太后しやうたうの死によって徽宗きそうの親政が始まったが、徽宗きそうも兄の哲宗と同じく父神宗の道を尊んで新法派に心を寄せた。人事を一新し、年号も崇寧すうねいと改め、改革を進めた。

これがいわゆる「**崇寧の政変**」である。

この時、罷免されていた蔡京さいけいが、再度登用され宰相の地位まで昇りつめた。彼は厳しい弾圧を加えることによって、自らの権勢を強化する一方、文弱で政治的に無能な徽宗きそうをそそのかして、奢侈しやし逸楽の生活に耽りふけだした。

神宗時代から数え、およそ三十年間にわたる新法・旧法両派の争いは、蔡京さいけいが専権を極めたことによってようやく収まったともいえるが、それによって新法が推進されたわけではなく、そのおさまりがそのまま北宋の滅亡につながって行ったのである。

徽宗朝二十五年間を通じ、実質上国政を左右したのは蔡京であった。蔡京は立身出世、権力のためなら、なんでもやつてのける男だった。徽宗が日常の生活を思いっきり豪華にすることを考えれば気に入られるように尽くした。宮殿が次々に建てられ、庭園がつくられた。それらの費用は全て人民の租税である。人民の苦しみは一通りではなく、怨嗟の聲が野に満ちた。

このような時期に、はるか北の荒野に新興の国家が誕生していた。金である。

満州の中部から北部にかけての地方、当時の遼の北には、半遊牧、半農耕の生活をおくる女真族（ツングース族）が住んでいた。遼に憎しみを持っていたこの者たちが遼に叛き勢力を増して、金という国を建てた。遼と金が争っているのを見て、宗は金と協定を成立させ、宿敵遼を滅ぼした。ところがその過程で宗と金との間に不和が生じ、金の太宗は、宗のたび重なる背信行為にいきどおり、宗を徹底的に懲らしめる決心をした。

金の侵攻に驚愕した徽宗は位をその子欽宗に譲位した。

金軍は快進撃を続け、宗軍は抵抗すらできず遂に皇城への侵入を許し、二帝・后妃・皇族のほか官吏や技術者など数千人の者が捕虜となつて北に向かった。

金に連れ去られた二帝は、土地を与えられ、みずから耕して食を取らねばならなかった。かくて徽宗・欽宗の両帝はともに配所に崩じた。

第十七章 文人たちと思想家たち

宗時代は文運がきわめて隆盛であった。その理由はいろいろあるが、歴代の皇帝が文治を重視し、文人を優遇したことも、一因である。太祖は、建国の過程において武断政治の弊害をいやというほど体験し、即位後も節度使たちの相次ぐ反乱にあい、その平定に力を注がなければならなかった。そのために、武を中心とする政治の在り方に疑問をもち、武人を登用するのは誤りであると思つた。そして、へ宰相は、すべからく書を読む人をううべしと断じて、もっぱら文治に努めたのである。その後の二代、三代皇帝も太祖の意を継いで文人を中央、地方の官に任じた。さらに、六代神宗は王安石しん せいを拔擢、七代哲宗は司馬光し ばを親任している

欧陽脩

欧陽脩は廬陵ろりよう（江西省）の人である。四歳で父を失い、母の鄭氏ていにともなわれて、父方の叔父の曄よをたよつてずいしゆう隰州しゆう（湖北省）に移つた。曄よはその小役人だったが、はるばる自分を頼つてきた二人を厚遇しなかつた。

鄭氏ていは賢夫人で、冷遇にもめげずひたすら脩の教育に励んだ。紙や筆を買い与える余裕は無く、萩を筆に代え、地面を紙に代えて、知っている限りの詩文を脩に教えた。

脩はまた、叔父の蔵書を手当たり次第に読破した。

近在の素封家で、蔵書家の李家の主人が脩の好学の志を聞き伝えて愛蔵の書を貸してくれたのだ

が、その中に**韓愈**^{かんゆ}の文集が入っていた。

「よし、現代の韓愈になってやろう！」こうして韓愈の文集に導かれて、脩は、古文、詩、史学、経学に、その才能を存分に伸ばし始めた。

二十四歳にして脩は第一等の成績で進士に及第し、官吏生活に入った。優れた資質によって、やがて栄進の途をたどり、**観文殿**^{かんぶんでん}大学士、太子少師にまでのぼって致仕^{ちし}した。

官吏としての経験も立派であったが、脩の本領は、いうまでもなく文学、学問であった。

かれの優れた文才によつて、**司馬光**^{しばこう}、**王安石**^{おうあんせき}ほか、多くの後輩が彼に導かれて名を成している。

司馬光

司馬光は**歐陽脩**より十二年おくれて生まれた。ときに父の**司馬池**^ちが**光州**の令であったので**光**^{こう}と名付けられた。

光は七歳になったころから文才を発揮し始めた。父は、「とても自分の子とは思えない」といつて、常に同僚に自慢していたという。

二十歳にして進士に及第。その後地方官を歴任してから中央にかえり**智諫院**^{ちかんいん}に任ぜられて政治の得失を論じたが、かれの議論は常に当世の希望を代表していたといわれる。

光の文事における業績は、修史において華々しい。後世、光およびその流れをくむ者を一括して

史学派と称する所以である。光は年少のころから『春秋』を愛読し、いつかは史実を極めて大義名分を明らかにしたいと思っていた。そして始めて書いたのが『通志』で、戦国から秦までを簡潔に書いて英宗に奉ったのである。英宗は、対象とした年代が短いので全時代にわたる史書を編むことを要望し、できたのが『資治通鑑』であり、その書名は神宗から賜った。

蘇軾

「春宵一刻值千金」という句は、あまりにも有名であろう。この詩の作者が蘇軾である。

軾は東坡と号した。また、父の洵を老蘇、弟の轍を小蘇と呼ぶのに対して、大蘇と呼ばれる。

この親子は優れた文人だったので、親子三人を総称して三蘇という。

二十二歳になった軾は弟の轍とともに進士に及第する。そのときの答案を見た試験官の歐陽脩は、

「若いが、この人には一目おかざるをえない」と詠嘆し、仁宗もこれを読んで、「子孫のための宰相が二人できた」と賞賛している。

軾の才能はこのように素晴らしかったが、官僚生活は順調でなかったばかりでなく、貶謫（官位を下げて遠方の地に左遷する）のうきめにさえあった。先に述べた保守・革新の政争で王安石と衝突し、その一党に憎まれて地方に貶され、あるいは獄に投ぜられたのである。

宗 学

宗代に文学は美しく花開いたが、けいがく経学（孔子の教えを書いた経書を研究する学問）もまた勃興し、いわゆる宗学の隆盛をみるに至った。

儒教は、孔子を始祖とし、孔孟の教えを中心として、先秦時代（秦の始皇帝以前の時代）にあつては倫理道德の学として伝えられた。漢代においては、学者は經典の解釈のみに終始し、くんこ経学はすなわち訓詁（字句の意味の解釈）の学であつた。それは六朝をへて唐代まで受け継がれた。

したがって、唐代の学者は經典について独自の意見を持たず、ただ『ごきようせいぎ五経正義』（唐初につくられた五経の古い注釈をさらに注釈した書）のみを唯一のよりどころとしていた。

宗代になると、学者は經典に対して各自の意見をもち、經典の解釈よりも形而上の自家の意見をかいちん開陳（大勢の前で意見を述べること）することに重点を置くようになった。そして漢・唐の儒者を儒教史上より除きさり、孔孟の直接の後継者をもつて自認した。

すなわち・・・孔子の正統は曾子（そうしん曾参）に伝わり、子思から孟子に及んだ。孟子が歿するとその伝が絶えた。それから約千四百年たつて宗の中葉に至り、しゅうとんい周敦頤がでて天命と人性をあきらかにした。その後、ていこう程顥・ていい程頤が周子（しゅうとんい周敦頤）の説を継承して、『大学』『中庸』の二編と『論語』『孟子』とあわせて四書をさだめた。二程子（ていこう程顥・ていい程頤）はこれを朱熹（しゆき朱子）に伝え、朱熹はこれを集大成したといわれる。このように、しゅうとんい周敦頤に始まり朱熹にて完成されたのが宗学である。

周 敦頤

若くして科挙をへずに官途につき、地方の小役人として終始し、廬山に隱棲して世を去った。官吏としての榮達はその志すところではなく、もっぱら學問を本領として貧賤にやすんじていた。南安なんあんで勤務していた時、太守として洛陽から赴任してきた程珦ていきようは、周敦頤しゅうとんいが常人ではないのを見てとって、その學識に敬服した。そして二人の子を彼について學ばせた。その二人の子は顥こうと、頤い即ち二程子にていしである。

敦頤とんいの著作に『太極圖說たいきよくすせつ』があるが、これは宇宙の根源である太極から万物が生成展開してゆく筋道を図解したものである。、即ち太極から陰陽、陰陽から五行ごう（万物の構成要素・木火土金水）、五行から万物、万物から人間、人間から聖人への關係を説いた。

彼が宗學の始祖と讃えられるようになったのは、朱子が彼を二程子の師と断じ、孟子以後絶えていた道統がかれによって受け継がれたと主張してからである。

二程子

程顥ていこうは弟の頤いとともに周敦頤しゅうとんいに學び、その影響で科挙に應ずることを嫌い、道を求める志をいだいた。程顥ていこうの中心課題の一つは宇宙論である。かれは陰陽二氣（相對する二つの氣）の交感によって天地間の万物（人間も含む）がつくられると考えた。

程頤は兄の顥が寛弘温和であつたのに対して、頤はすこぶる峻厳な氣質の持ち主であつた。

哲宗が即位してまもなく、司馬光の推薦によつて侍講（天子に講義する官）になったが、皇帝だからといって仮借するところがなかった。こうした彼の峻烈な態度は皇帝だけでなく百官に対してもおなじであつた。そのため、かれは小人の讒言により地方に貶おとされた。

頤は常に誠敬を重んじていた。誠敬とは周敦頤の主静からでている。主静は禅学の無心と同じである。頤は禅学から脱しようとして、主静を誠敬と改め、それを頤が受け継いだのである。

第十八章 南宋王朝（九代 一五二年）

宗都汴京が金軍の手中に陥つた時、徽宗の第九皇子康王構は、たまたま他の地にいて、危難を免れた。というのは。

欽宗が土地の割譲ほか、屈辱的な条件で金と和議を結んだが、康王構は、その割譲使節として金へ派遣された。ところが途中で徹底抗戦を叫ぶ連中や、抗金意識の高い人たちによつて北行せぬように請願され、ぐずぐずしている間に戦端が再開されてしまった。そこで康王は乞われるままに大名府に入り、そこで汴京陥落の報に接したのである。

康王は、その翌年南京で即位した。これを高宗という。後、南渡したから、高宗以後を南宋と呼んでいる。

朱子と陸象山

朱子（朱熹の尊称）は名を熹きという。南宋の初めに生まれ、十九歳にして進士に及第し、官界に入った。周敦頤しゅうとんい・二程子にていし以来の思想を集大成して、朱子学をたてた哲学者である。

朱子と殆ど同時代に生き、学問的に激しく対立し、べつに一学派をなしたのが陸象山りくしょうざんである。かれも進士に及第して地方官を歴任したが、官位はあまり進まなかった。

朱子と象山の対立点は、まず、その学問の系統が異なる。朱子は二程子にていしのうち程伊川ていせいせんを宗としているのに対し、象山は二程子にていしのうち程明道ていめいどうを宗としている。

次に『中庸』にいわゆる徳性を尊びて、学問に道よるをめぐる対立である。

朱子は「道問学」を主とし、「知」をさきにし「行」をあとにする。学問には、くずすべからざる秩序がある。これに対して象山は「尊徳性」を主として「行」を重しとする。

次に太極説について二人の対立は熾烈を極めた。

周敦頤しゅうとんいが著した『太極図説』の二元か一元かの対立。朱子は、理氣二元をたてたのに対し、象山は氣の一元を主張した。

生涯論争を続けた二人を和解させるべく、呂祖謙りよそけんが立ち上がるも成果を得ず、二人の確執は、遂に象山の死に至るまで解けなかった。象山の死から八年後に、朱子も七十一歳でこの世を去った。

偽学の禁

四代皇帝、寧宗ねいは即位すると趙汝愚ちやうじよぐを宰相とし、宰相の勧めで朱熹を登用し、侍講とした。

朱熹およびその「道学」に対しては、三代孝宗のときから「道德の名をかりて偽善をなすもの」として誹謗を加える者があり、朝廷にはこれを是とする者と非とする者との対立があらわれて、非とする者はこれを「偽学ぎがく」と呼んだ。

朱熹は朝廷にあることわずか四十六日で韓侂胄かんたぐちゆうのために放逐されることとなる。

韓侂胄かんたぐちゆうは寧宗を擁立するときから頭角をあらわし、また寧宗ねいの皇后韓氏一族でもあったため、外戚の身を誇って専横の振る舞いが多かった。朱熹もこの専横を指摘し、寧宗ねいの蒙もうを啓ひらくことに努めた。しかし、寧宗ねいは韓侂胄かんたぐちゆうに「朱熹は用いるにたる人物ではない」と進言されたことに重きをおき、ついに朱熹を罷免、放逐した。というわけである。

趙汝愚ちやうじよぐに怨みを持つ韓侂胄かんたぐちゆうは、趙汝愚ちやうじよぐを失脚させる為に、朱熹を任用した責任を問うて、きびしく弾劾した。そのため、趙汝愚ちやうじよぐは宰相の職に在ることわずか半年で罷免され流された。

韓侂胄かんたぐちゆうはさらに「偽学ぎがく」の攻撃運動を進め、反対勢力の一掃をはかる「偽学の禁」が公布された。

この年、朱熹は「偽学の首魁しゅかい」として官職を剥がれ、門弟は流され、あるいは罪された。

その三年後、朱熹は七十歳で病死。更にその六年後、韓侂胄かんたぐちゆうは宰相となった。

寧宗は在位三十年。その前半十三年間は外戚（韓侂胄）に政權をあやつられ、後半の十七年の間、政權を握っていたのは、韓侂胄誅殺の功によって一挙にのし上がった史弥遠であった。

史弥遠は侂胄のように皇室と関係があるわけでもなく、権力を振るうわけにもいかない。そこでは、傀儡皇帝を仕立て上げる方法を考えることになる。

寧宗には子が無かった。そこで皇太子を、太祖趙匡胤の系統から求めることになった。その経緯の間に、史弥遠が画策して、宗室の子孫である貴誠を継嗣にすることに成功した。以来、かれの死ぬまでの十年間、宗の政治は弥遠に壟断（利益を独占する意）されることになる。

成吉思汗

「偽学の禁」が公布され、朱熹らを一掃した韓侂胄は、開禧元年（1205）宰相となったが、その翌年、蒙古ではモンゴル部族の鉄木真が成吉思可汗と称して全蒙古の可汗（大王）となった。すなわち元の太祖である。

蒙古族は黒竜江の上流、オナン・ケルソン両河流域の草原地帯やその水源の森林地帯に、いくつもの集団にわかれて、互いに遊牧地や狩猟地を争いながら移動していた好戦的な種族であった。

高宗の紹興三十二年（1162）にテムジン（後のジンギスカン）は生まれた。父親を殺され、隷属していた氏族は離散してしまい不遇な時期を過ごす、気丈な母親のもとに冷酷残忍な性格と

権勢欲とを身につけていった。

テムジン二十八歳のとき、同族の者らに推されてモンゴル部落の汗（大王）となった。さらに四十五歳のときには全蒙古の可汗となり、成吉思可汗（正しくはチンギスカガン。盛大なる大王の意）の尊号を受けた。

その後の成吉思汗は各方面に遠征をくりかえし、北はシベリアのバイカル湖周辺やロシアの南部へ、南はインドのインダス河のほとり、西にはコーカサス山脈を超え、キプチャ草原（カスピ海と黒海の北方）まで至る。ここに至って、中央アジア征服の目的を殆ど達成した成吉思汗の最後の戦いは、西夏への侵攻であった。が、その途中で六十六年の生涯を閉じた。

まもなく西夏王李睭が来降した。蒙古軍は成吉思汗の遺命により李睭とその一族を殺し、西夏は滅んだ。

蒙古軍にとって、あと残すは中国本土の宗のみとなった。成吉思汗の死後、孫のフビライが西方からじりじりと宗へ迫った。

買似道

蒙古軍の侵攻が開始されたとき、宗では右丞相の買似道を防衛に当たらせた。買似道はただちにフビライと対峙したが、精悍な蒙古兵の前になすすべもなく、死傷者は一万三千に達した。おじけ

づいた買似道は、宗が蒙古に臣従するという条件で和議を申し入れたがフビライに一蹴された。

困り果てていたとき、合州の守将王堅おうけんの急使が到着した。

これよりさき、合州県域を囲んでいたモンケ汗（フビライの兄・四代目の汗）が陣中において歿した。買似道かじどうが王堅より得た知らせがこれであつた。喜んだ買似道は再び密使をフビライに送つて和議を申し入れた。

モンケ汗が陣没したとの知らせは、フビライのもとにも届いていたので、この和議を受け、買似道かじと歳幣ちようへい（朝貢国として年ごとに贈るもの）をおさめることを条件に、和議を結ぶとわずかの手兵を率いて急慮北方に帰した。

そのとき湖南方面で戦闘中の蒙古軍も、和睦が成つたものと思ひ、北上を開始し、帰還を急いでいた。と、これを見た買似道かじどうは突然蒙古軍の殿軍しんがりに不意打ちをかけ、百七十名の兵を斬り殺してしまつた。帰つた買似道は、フビライに対し歳幣をさだめ、和を請うたことなどおくびにも出さず、じぶんの奮闘により大軍を退けたと、したり顔して誇つたのである。里宗は、これぞ社稷しゃしよくの救い主とばかり喜んで莫大な賞与を賜うた。

さて北方に帰つたフビライは、翌年、おされて第五代の大汗となり、即位の式をあげた。そして買似道かじどうとの約束を実行させるために宗朝に使者を立てることにした。

ところが買似道は使者が来ると聞くや、これまでのごまかしが暴露するのを恐れ、使者が南宗の

勢力範囲に入ろうとするとところで待ち伏せして捕縛し、真州の軍営に閉じ込めてしまった。

ここでの使者（郝經^{かくけい}）一行に対する取り扱いは、罪人に対するよりひどかったと史書は伝えている。郝經^{かくけい}は、書面をもって里宗や朝臣に連絡を試みるが、すべて買似道^{かじどう}によって中断され、里宗のもとへはいっこうに通じない。下界との連絡を完全に遮断して、事の漏れるのを嚴重に警戒した。驚くべきことにこの監禁は、以後十数年も続けられ、のちに元軍が南宋に侵入して来たとき、やつと助け出されたのである。

買似道^{かじどう}はこのような子供だましの方法で当面を糊塗しても、隠しおおせるとは信じていなかった。不安にかられた買似道^{かじどう}は、事実を漏らしそうな人物を極力警戒し、これとにらんだ危険人物は相手かまわず片っ端から無実の罪をデッチあげて、死刑に処せしめた。

買似道^{かじどう}が危険人物とにらむ人物は、逆に言えば宗朝にとって有為な忠臣である。重大な局面を前にして、朝廷内に有為な人物が姿を消して行き、買似道^{かじどう}によって政治は完全に壟断^{ろうだん}されてしまった。

フビライは、南宋が不信行為を重ね、約束を履行しないばかりか、平和使節まで監禁するという始末なので国交を断ち、阿求^{あきゆう}を征南大將軍に任命して襄陽（宗の前線基地）を囲ませた。

といっても、本格的な南征を企てたわけではなく、来るべきその前哨戦程度の試みであった。フビライは内政の充実を急務と考えていたのである。

フビライは、アジア全域に広がってしまった大帝国を自分一個の力で統御することが不可能であること、これからの帝国建立の基礎は、蒙古に置くべきではなく、資源に富み、豊かな経済力を持つ中国にこそ置くべきであること、それには中国の完全な掌握こそがこれからの道である、ということをはっきりと洞察していた。それには適当な土地を選んで都城を造り、中国という文明社会を統御するに足る高度の国家体制を、一刻も早く樹立したいと考えていたのである。

一二一七年（度宗たくの咸淳七年）フビライは国号を「大元」と改め、襄陽を落とした。

里宗の次に立ったのは度宗たくである。この擁立に力を尽くしたのは買似道かじどうだったので買似道かじどうの勢力はいよいよ伸び、専横ぶりは極度に達した。

度宗たく即位の年、買似道かじどうは西湖の北岸に邸宅を賜った。ここには南宋第一代の天子高宗が建てた立派な庭園があった。買似道かじどうはここから五日に一度、登朝するだけで、あとはここで豪遊していた。

襄陽が陥落した翌年、度宗たくは在位十年、三十五歳をもって崩じ、四歳の皇太子が即位した。

恭宗きょうそうという。

この年、フビライは伯顔ばやんを総帥に任じ南下を命じた。その征途、南宋の兵は闘志を失い、寝返りをうつ者が続出した。やがて建康（南京）が陥落した。臨安（南宋の都）は風前の灯火である。

廷臣の逃亡は相次ぎ、人心騒然たる中で、留守を預かる軍政の長官陳宜中ちんぎちゆうは、遷都を主張する首

謀者を誅して覚悟のほどを示し、都下に戒嚴令をしいた。かたわら買似道を弾劾して不忠不孝の罪に問い、流謫に処した。買似道は逃亡中に捕えられ、厠の中で護送役人から胸をへし折られて死んだ。この役人は、父が買似道に落しいれられた仇をうつため、この任を願い出た、と言われている。

文天祥

元軍は、すでに浙江の国境に迫っていた。朝廷は諸方の軍將に兵を集めて上京するよう促したがほとんど応じるものがなかった。ただここに二人の例外が現れて、見捨てられた小舟にも等しい宗朝廷を救おうと勇ましくも起ちあがった。張世傑と文天祥である。

張世傑は地方の軍官であった。臨安の危機を見て、朝廷から召集が下りる前に、自分から兵を引つさげて京師（天子の都）に赴いたのである。

文天祥が起つたのは、これより少し前、未だ建康が無事だった頃である。朝廷が天下に勤王の志士を求めたとき、直ちにこれに応えて、故郷の吉州の地に民兵を募り、約二万の兵を得た。

文天祥は文官であつて、武人ではない。富裕な旧家の長男として生まれ、幼児より勉学にいそしんだ。二十歳になった文天祥は、官吏登用試験を受け、堂々一万字を超える大論文を書いて、首席で合格した。中央および地方の官を歴任、中央にいたとき、買似道の怒りにふれて退けられたことがある。

元軍の総帥、伯顔が臨安へ入城した。朝臣らは、幼帝（恭帝）、それに里宗と度宗の両皇后三人

を奉じて伯顔に降り、ここに臨安は落城した（1276）

伯顔ばやんはこの三人と、重臣その他の官吏を合わせて数千の者を上都に送った。文天祥もその中にいた。護送中鎮江まで来たとき、文天祥の部下がこっそり小舟を手に入れて、文天祥を脱出させてくれた。ここから食うや食わずで温州までたどり着いた。

さて、臨安が落ちる寸前、恭帝の兄の益王と弟の広王が臣下に助けられ福州へ逃れ、ここで益王が皇帝を名乗っていた。端宗たんという。

温州から福州へは近い。文天祥はただちに福州の行在所あんざい（行幸先の天子の所在地）へ走った。

文天祥は右丞相に叙せられたが他と意見があわず、丞相を辞して福州の朝廷とは別行動をとった。南劍州で六千の兵を集めた文天祥は、汀州を突いて元軍を撤退させ、ここを暫時の根拠地とした。これを聞いて各地の志士たちが、文天祥を慕って集まって来た。これをみた元軍は汀州を撃った。文天祥は敗れて奥地に入り、しばらくは勝ったり負けたりの状態を続けたが、端宗たんが即位して一年、元側は大勢の援軍を出して文天祥を攻めたため、文天祥の部隊は事実上壊滅した。

一方、陳宜中ちんぎちゆう・張世傑ちようせいけつらは、端宗たん・広王を奉じて転々と行在所を移していたが、端宗たんは病気で死に、広王が後を継いで帝となった。崩じた端宗たんは十歳、新帝は八歳だった。

文天祥も元兵に捕えられた。持っていた毒薬を飲んだが死にきれず、縛されて張弘範の前につきだされた。弘範は縛をとき客礼をもって対した。

次の年、張弘範は厓山がいを攻めた。厓山は陸地からわずかに離れた島だが、張世傑ちようせいけつの力戦奮闘にあつて容易に降することができず、手を焼いてしまった。たまたま元の軍中に張世傑の甥がいた。この甥をやつて投降をすすめてみたが、無駄だった。そこで陣中に連れてきていた文天祥に投降の勧告文を書かせようとしたところ、

「国を救うことのできなかつた自分が、なんで他人の国に、そむけと勧められよう！」

と固く断つた。しかしなお執拗に求められると文天祥は「零丁洋を過ぐるの詩」という一遍を書いた。その最後に言う。

人生、古より誰か死なからん

丹心たんしんを留取いにしえして、汗青かんせいを照らさん

末の句は「赤心をとどめにおいて、書籍をかがやかし、歴史に不滅の名を残そう」との意味である。

「零丁洋を過ぐ」(文 天祥)【2巻の176頁】零丁洋は広東省珠江ちうかうじやんの河口の海の名。天祥が元軍

に捕らえられ、厓山がいまで護送されたとき、ここを通過した。四周星は、四年間のことで恭帝、

が元に降つてからこの時まで。皇恐灘くわうきやうなんだは江西省を流れる贛水かんすいにある十八灘(難所)の一つ。

かつて蘇軾が流罪にされて通つた所。零丁とは孤独で落ちぶれる意。丹心は、まごころで

赤心と同意。汗青かんせいは歴史の書物。紙の無かつたころ、竹の札を書写材料にした事から転じた。

弘範は厓山の土民を説いて、宗軍の投降を試みるも失敗。そこで島を包囲して、真水を絶った。宗兵は海水を飲み、ために嘔吐して苦しんだ。やがて壮烈な海戦が始まった。多勢に無勢、しかも健康をそこない、疲労困憊の宗兵。もはやどこすすべなしと見てとった陸秀夫は、まず自分の妻子を駆って海に入らせ、次に自分も九歳の幼帝を背負って海に沈んだのである。

南宋はこうして滅亡した。北宋の建国より凡そ三百二十年である。また臨安を都落ちしてから三年目の西紀一二七九年のことである。

厓山が陥落すると、弘範は勝利の酒宴を開いた。その席で文天祥に、

「国が滅んだ以上、あなたの忠も十分尽くされたのです。宗朝に尽くしたその誠心で、元にお仕えになるならば、立派な宰相になれましょうに！」

天祥は涙をながして、二心を抱くことの不可を説いた。

文天祥は大都に護送され、途中郷里の吉州を通るとき、八日の間、食を絶った。せめてこの郷里で死にたいと思ったのだ、と言われている。

大都に着いた文天祥は、迎賓館に迎え入れられ、手厚い待遇を受けた。ついで兵馬司の手にうつされ、四年間の苦しい獄中生活が始まる。

元朝では、文天祥の人格と才能を惜しむ者と、それを恐れる者とがあり、生かすか死罪に処すか

態度を決しかねて、このような長い監禁になったもののようである。

世祖フビライも天祥の才を惜しむ側だった。しばしば元朝への投降を求めたが、天祥は相手にしてくれなかった。こうして四年、世祖は渋々ながら処刑の命令を下した。

天祥は一刻も早く死すること、それが望みだったのである。獄門を出た天祥は、意気揚々として刑場に向かった。刑に臨むとき、史卒をかえりみ、

「わが事、終れり！」

といい、南方を拝して従容と死にいたのである。時に四十七歳。

獄中にあつてものした「正氣の歌」^{せいぎ}は、あまりにも名高い。その序によれば、獄屋は狭くて暗く、夏にはひどい湿気と暑気とに苦しまなければならなかったらしい。風通しは悪く、死臭鼻をつく。この苦しさに耐え得たのは、天祥の身中に人力を超えた生気がみなぎっていたればこそに違いない。

詩に言う。

天地、生氣あり

雜然として流形に賦す

下は則ち河獄となり

上は則ち日星となる

あとがき

書き終わって読み返してみると、理解しにくい部分やもっと知りたい箇所あるいは詳しい顛末等々まったく記されていない。当然である。

中国三千年の歴史を、A5判で八十頁に収めること自体無謀極まりない。

しかしことの発端が「まえがき」に記したように、私自身が中国史を把握したかった為であり、いわば樹木の幹でしかなく、小林メモとして理解していただきたい。したがって枝葉を見たい方は別に書を得てご覧いただきたいとおもいます。

これを機に少しでも中国史に興味がわいていただけたなら幸甚に存じます。この冊子をつくるに際し、校正・印刷・製本に懇切なる対応をして頂いた三陽メディア株式会社の加藤英彦さんに深甚なる謝意を表します。

